岡田向遺跡・本田氏館跡
発掘調査報告

～三重県伊賀市岡田・柏尾所在～

2007（平成19）年３月

三重県埋蔵文化財センター

岡田向遺跡・本田氏館跡上空より（西から）

序

布引山中に源を発する一級河川木津川は旧青山町の北西部をゆるやかに流れております。ここ岡田向遺跡と本田氏館跡は木津川左岸の段丘上と丘陵上に分布する遺跡です。

近年の発掘調査によって、岡田、柏尾地区では古く、縄文時代から人々の生活が営まれ、生産活動が活発に行われた様子が分かってきました。特に当地域は、木津川を望む小高い丘陵地にあるところから地域の有力者たちの古墳も造営され、文化が隆盛したと考えられます。

さて今回の報告は、農村総合整備事業に先だって実施した発掘調査の成果です。この調査によって岡田向遺跡では１次調査に続いて、古墳に関わる遺物や当時の人々の生活用具や建築部材を含む多種多様な木製品が出土しました。これら貴重な出土品のひとつひとつを整理し、記録保存に努め、それらを含む調査の全容を、県内外の人々に公開することが我々の役目であると考えております。

末筆ですが、調査に協力いただいた地域の方々をはじめ関係諸機関の皆さまに厚くお礼を申し上げる次第です。

平成19年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　吉水康夫

例　言

1　本書は、三重県伊賀市岡田字向及び柏尾字中森に所在する岡田向（おかだむかい）遺跡と本田氏館跡（ほんだしやかたあと）の発掘調査報告書である。

2　本書が扱う原因事業は、平成16年度農村総合整備事業（畿央伊賀地区）である。

3　発掘調査の体制は以下のとおりである。
調査主体　　三重県埋蔵文化財センター
調査担当　　現地調査　　調査研究Ⅱグループ　ＧＬ　泉　雄二、主査　中川　明
調査協力　　伊賀市教育委員会（旧青山町教育委員会）
調査受託者　　（株）安西工業
保存処理機関　（株）吉田生物研究所

4　本書の執筆、編集は中川明が行い、遺物写真撮影も中川が担当した。

5　本書が対象とした調査面積は岡田向遺跡が212㎡で、本田氏館跡は1,400㎡である。

6　本書が対象とした現場調査期間は平成16年９月16日から平成17年１月31日である。

7　本書で示す方位は、真北を用いた。なお、今回は世界測地系に準拠し、方位を示しており、座標北は０度18分西偏し、磁北は６度40分西偏している。（平成10年、国土地理院）。

8　本書で使用した遺構表示略号及び名称は凡例のとおりである。

9　本書で表記する色調は、小山・竹原編「新版標準土色帖」（第９版1989年）に準拠した。

10　発掘調査及び本書の作成に際しては、伊賀市教育委員会職員、地元柏尾、岡田地区在住の方々に協力いただきました。記して謝意を表します。

11　発掘調査の経費は三重県農水商工部が負担した。

12　本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

(地図類)

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、旧青山町計画図、農村総合整備工事図（三重県農水商工部）である。

2　上記地図類のうち、国土地理院発行地形図は旧地形を表記するため掲載した。そのため国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標)で表現されている。現在使用されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。
ただし、調査区位置図の元となる整備工事図については、世界測地系に基づいて作製してしている。

3　挿図の方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北で示している。なお、磁北は6°40′西偏している。(平成10年、国土地理院)。

(遺構類)

4　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

5　土層図の色調は、既述のとおり、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(第9版1989年)を用いた。

6　当報告書での遺構番号は各遺跡毎に１からの通番となっており、確認したものから順に付番している。

7　作業日誌抄については作業着手順に記している。

8　本書で使用した遺構表示略号は以下のとおりである。
ＳＸ：墓・周溝　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　Pit：柱穴・小穴

9　遺構は、調査時に付加した遺構番号を基本的に使用しているが、整理中に変更したものもある。その変更は遺構一覧表に示した。なお、出土遺物の注記については、調査時の遺構名をそのまま使用した。

(遺物類)

10　当報告での遺物実測図類は実物の１/４を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。

11　遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。

12　当報告書での用語のうち、つぼは「壷」、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。

13　遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 …… 挿図掲載番号である。
実測番号 …… 実測段階の登録番号である。
器形 …… 「壷」「椀」といった通有の形状を示した。
器種 …… 遺物の器種を示す。
グリッド …… 調査時に設定したグリッド名を記した。本田氏城跡については、当初４分割の大地区を設定して行い、付番した。なお、後で岡田向遺跡と併せてグリッド番号を割り当てている。
遺構・層名 …… 遺物の出土した遺構や層名を記した。
計測値(cm) …… 遺物の規格等を示す。(口）は口縁部径、(底）は底部径、(高台）は高台部径、(脚柱）は脚部上端径、(脚裾）は脚台裾部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。
調整・技法の特徴 …… 特徴を外面（外：）・内面（内：）で示した。調整は、基本的に各面の上から下端にかけて施されている方法を順に記した。
胎土 …… 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調 …… その遺物の外、内面の基本的な色調を記載した。カラーコードは、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度 …… 土器についてその部位を12分割表示とし、残存度合を示した。各部において12/12は完存と表記した。
特記事項 …… 遺物の特徴となる事項を記した。ヘラ記号や墨書有りなど。

(写真図版)

14　写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。

15　挿図と写真図版の遺物番号は、それぞれの遺跡毎の実測図番号と対応している。

16　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本 文 目 次

第１章　前　言 …… (1)
1　調査に至る経緯 …… (1)
2　調査に至る経過 …… (1)
3　調査の体制と委託にかかる経緯について …… (1)
4　調査の方法 …… (1)
5　資料の公開・普及・保存について …… (2)
6　調査の方法・経過 …… (3)
7　文化財保護法に関する諸通知 …… (3)

第２章　位置と歴史的環境 …… (5)
1　縄文時代 …… (5)
2　弥生時代 …… (5)
3　古墳時代 …… (5)
4　古代～中世 …… (5)

第３章　岡田向遺跡の遺構 …… (7)
1　基本的層序 …… (7)
2　遺　構 …… (7)

第４章　岡田遺跡の出土遺物 …… (11)
1　ＳＤ１出土土器 …… (11)
2　ＳＤ１出土木製品 …… (11)
3　包含層出土土器 …… (13)

第５章　本田氏館跡の遺構 …… (23)
1　地形・層序 …… (23)
2　遺構概要 …… (23)
曲 輪 Ⅰ …… (23)
曲 輪 Ⅱ …… (23)
曲 輪 Ⅲ …… (23)
曲 輪 Ⅳ …… (24)
中 世 墓 …… (24)
土　坑 …… (24)

第６章　本田氏館跡の出土遺物 …… (34)

第７章　結　語 …… (37)

第８章　自然科学分析 …… (株) 吉田生物研究所 …… (41)

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 ……(4)
第２図　調査区位置図 ……(6)
第３図　調査区配置図 ……(7)
第４図　岡田向遺跡土層断面図 ……(8)
第５図　岡田向遺跡遺構平面図、ＳＤ１・ＳＢ２実測図、Ｂ２Pit３・６断面図 ……(9-10)
第６図　調査区地区割図 ……(9-10)
第13図　本田氏館跡地区割図 ……(24)
第14図　土層断面図 ……(25)
第15図　土層断面図 ……(26)
第16図　調査前測量図 ……(27-28)
第17図　本田氏館跡測量図 ……(29)
第18図　曲輪Ｉ平面図・断面図 ……(30)
第19図　ＳＸ13・14実測図 ……(31)
第20図　ＳＫ１・２・３・４・５・６実測図 ……(32)
第21図　ＳＫ７・８・９・10・11実測図 ……(33)

表 目 次

第１表　遺物観察表１ ……(19)
第２表　遺物観察表２ ……(20)
第３表　遺物観察表３ ……(21)
第４表　遺物観察表４ ……(22)
第５表　遺構一覧表 ……(25)
第６表　遺物観察表 ……(36)
第７表　ＳＸ13石材計測表 ……(39)
第８表　ＳＸ14石材計測表 ……(40)
第９表　樹種別出土点数一覧 ……(40)
第10表　岡田向遺跡出土木製品同定表 ……(43)

遺物図版目次

第７図　出土遺物実測図（１）……(13)
第８図　出土遺物実測図（２）……(14)
第９図　出土遺物実測図（３）……(15)
第10図　出土遺物実測図（４）……(16)
第11図　出土遺物実測図（５）……(17)
第12図　出土遺物実測図（６）……(18)
第22図　出土遺物実測図（７）……(34)
第23図　出土遺物実測図（８）……(35)
第24図　槌の使用例 ……(38)

写真図版目次

図版１　岡田向遺跡遺構写真（１）……調査前風景・調査区全景
図版２　岡田向遺跡遺構写真（２）……調査区西壁土層・ＳＤ１
図版３　岡田向遺跡遺構写真（３）……ＳＤ１柱穴・各柱痕半切状況
図版４　岡田向遺跡遺構写真（４）……ＳＤ１木製品出土状況・槌出土状況
図版５　岡田向遺跡出土遺物（１）……ＳＤ１出土土器
図版６　岡田向遺跡出土遺物（２）……ＳＤ１出土土器
図版７　岡田向遺跡出土遺物（３）……ＳＤ１出土土器
図版８　岡田向遺跡出土遺物（４）……包含層出土土器
図版９　岡田向遺跡出土遺物（５）……ＳＤ１出土木製品
図版10　岡田向遺跡出土遺物（６）……ＳＤ１出土木製品
図版11　岡田向遺跡出土遺物（７）……ＳＤ１出土木製品
図版12　岡田向遺跡出土遺物（８）……ＳＤ１出土木製品
図版13　本田氏館跡遺構写真（１）……調査前風景・調査区西斜面
図版14　本田氏館跡遺構写真（２）……調査区全景
図版15　本田氏館跡遺構写真（３）……東斜面
図版16　本田氏館跡遺構写真（４）……ＳＸ13・腰曲輪他
図版17　本田氏館跡遺構写真（５）……東半・丘陵頂
図版18　本田氏館跡遺構写真（６）……西・東斜面
図版19　本田氏館跡出土遺物（１）……表土・ＳＫ２

写 真 図 版 目 次

図版20　本田氏館跡出土遺物（2）
図版21　本田氏館跡出土遺物（3）

分析結果組織写真

図版22　木製品No1～3
図版23　木製品No4～6
図版24　木製品No7～9
図版25　木製品No10～12
図版26　木製品No13～15
図版27　木製品No16～18
図版28　木製品No19～21
図版29　木製品No22～24
図版30　木製品No25～27
図版31　木製品No28～30
図版32　木製品No31～33
図版33　木製品No34～36
図版34　木製品No37～39
図版35　木製品No40～42
図版36　木製品No43～45
図版37　木製品No46～48
図版38　木製品No49～51
図版39　木製品No52～54
図版40　木製品No55～57
図版41　木製品No58～60
図版42　木製品No61～63
図版43　木製品No64～66
図版44　木製品No67～69
図版45　木製品No70～72
図版46　木製品No73～75
図版47　木製品No76～77

第1章　前　言

1　調査に至る経緯

地域に根ざす農林業は、年々深刻な問題を抱えている。特に市街地と距離をおく市町にとっては、交通網とあわせて必至の問題である。青山においても産業従事者が高齢化し、流通面の低迷化が進んでいる。

今回の事業地は、伊賀市岡田字向及び柏尾に位置する。平成16年度に消滅する部分について遺跡保存の協議を当該部局の伊賀県民局農政部および旧青山町農林部と再三にわたり協議をもった。この協議の結果、事業によって消滅する部分が広範囲に及ぶことが判明し、これを受けて現状保存の協議を行った。しかし、広域農道の整備は地元市民必至の問題であり、問題解決のためには、速やかに発掘調査を実施し、両遺跡について記録保存を行うことが求められている。

この事業計画に関わる周辺の埋蔵文化財の事前調査は、断片的に実施している。近年では、当該部局により事業照会のあった計画範囲が各遺跡を縦貫するため、当センターでは西から順次、分布調査や試掘調査の協議を開き、これに対応してきている。

このうち阿保地区に所在する中出向遺跡、羽根中島遺跡、花代遺跡、沢代遺跡は旧青山町や当センターによってそれぞれ近年発掘調査が実施された。これらの遺跡からは古墳時代を中心にした竪穴住居やこれに伴う遺物が出土している。

今回の岡田向遺跡は、旧青山町遺跡調査会によって昭和61年度に１次調査が実施されており、その結果、１号墳からは５世紀の須恵器や土師器が数多く出土した。

今回の調査は、農道整備事業の一環で実施されるもので、当遺跡の東側の縁辺部と東側丘陵の一部分が対象となる。なお、本調査については安西工業に委託している。

2　調査に至る経過

今回の岡田向遺跡、本田氏館跡はそれぞれ本調査や予備調査によって周知されており、遺跡番号は191及び144である。岡田向遺跡は、古墳時代の集落跡であり、この時代の遺物が出土している。中でも石室を有する１号墳が確認されている。本田氏館跡では、分布調査において、曲輪や井戸が確認されている。

これらの結果をもとに農林水産商工部基盤整備課と協議し、農道敷設工事が遺跡の一部を消滅させることが判明したので、緊急発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることになった。調査期間は、平成16年９月16日から平成17年１月31日である。

3　調査の体制と委託にかかる経緯について

当該年度の発掘調査体制は以下のとおりである。なお、今回の本調査にかかる調査委託については記録部門と土工部門の両部門を含む委託内容であり、受託者は、登録名簿に挙げられた企業体のうち、指名競争入札により落札された業者と契約を結ぶことになっている。

委託業務の施工については両者の協議後、実施され、発掘調査に着手してきている。下記の担当者はすべて監督員として、調査現場の施工管理を行い、調査業務の進行について、指揮・監督した。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅱグループ
　　ＧＬ　泉　雄二
　　主査　中川　明
調査委託　安西工業株式会社

4　調査の方法

調査区の設定は、両遺跡で単独のグリッド番号を配置した。可能なかぎり、道路センターラインを基軸にグリッド割を設定したが、曲線を描く箇所が多く、直線部分を使って任意の起点ポイントを決定し、４m四方のメッシュを区切った。

東西方向に西から１から15までを、南北方向にアルファベットのＡからＩまでを当てはめた。これら

の組み合わせで各地区を呼称し、掘削を開始した。

表土掘削着手に際しては、丘陵斜面が大部分を占める本田氏館跡につき、樹木伐採作業から開始した。この間に麓の岡田向遺跡の重機による表土掘削に着手した。

各グリッドには地区杭を打ち、座標については、基準ポイント、図面作成ポイントに対して旧座標をとりつけ現地調査終了時に世界測地系（日本測地系）に変換した。

5　資料の公開・普及・保存について

平成17年２月８日午前10時より現地説明会を地域住民を対象にして実施した。この際、柏尾地区の調査現地にて出土遺物である土師器や須恵器を展示し、保存処理のため公開できない木製品等はパネルにて展示説明を実施した。なお、岡田向遺跡については調査地の壁の崩落の危険性が出てきたので速やかに埋め戻したため、説明会当日は、パネル展示にて説明を行った。隣接市町からは40名の参加者があった。

両遺跡の出土遺物については埋蔵文化財センターの収蔵庫にて保管。保存処理の必要な木製品・鉄製品については（株）吉田生物研究所にて委託処理後、当センターにて保管。

6　調査の方法・経過

本田氏館跡の立木伐採から開始した。残土置場が両遺跡間の谷間に設定されていたため、本田氏館跡は急峻な山の斜面から排土を落さなくてはならず、全体の排土を１箇所に集めることは作業的にも危険性が高いためここへの排出は断念し、南側の緩斜面から平坦部へ排出する方法をとった。そして、掘削は南側の丘陵の張り出し部との間の谷に排土を捨てる形をとり、南側の一部を終了して後、北側へと掘削を広げていった。基本的に可能な限り、重機で表土掘削し、それ以下の遺構面までは移植ゴテやスコップ等を併用し、人力で行った。ベルトコンベアの設置には苦慮したが、丘陵南側から北側中腹までの掘削には、その進捗を速める結果となった。

一方、岡田向遺跡の調査は、本田氏館跡の表土掘削終了後の地区杭設定の合間をみながら、重機による掘削に着手した。当遺跡は、かつては場整備による事前調査が実施されていることから、かなり土壌は改変され、谷も形成されていることから湧水も激しく、難航が予想された。

調査前と調査後の地形測量を平板と光波測距儀を併用し実施した。測量図の縮尺は１／100である。このほか略測図を１／100、土層断面図や遺物出土状況図を１／20、土坑や集石遺構およびこれらの遺物出土状況図は１／10で作成した。事前測量図、全体の遺構図は１／20で作成した。全景写真の撮影は、丘陵部であることからローリングタワー上からの撮影は中止しラジコンヘリによる撮影を実施した。使用したカメラは４×５ライカでフィルムはコダックＥ100Ｇおよび100ＴＭＸである。補助的に35㎜のニコンカメラを使用し撮影した。

＜本田氏館跡調査日誌抄＞

10月12日　丁張設置作業実施。排土置き場等協議書作成。丘陵上で表土厚30㎝、根部は流出土が分厚く堆積。丘陵全体を４分割で調査実施か。

10月15日　ベルトコンベアを設置。Ｊ７・８区で土師器片と染付けを採集した。

10月18日　施行計画内容の確認、事前地形測量の準備。Ⅰ―Ｂ・Ｃ・Ｄヘベルコン設置。

10月21日　Ⅰ―Ｃ・Ｄ・Ｅ区表土掘削開始。表土厚はＤ区で50㎝程度。

10月27日　Ⅰ－Ｄ、Ｃ区検出の通路跡の肩部が落ちきった部分まで掘削する。Ⅰ―Ｅ地区南側で検出した階段状遺構が合坂になるか吟味して掘削を続行。

10月28日　Ⅰ―Ｃ・Ｄ・Ｅ区掘削完了。掘削完了につき、全景写真撮影。

11月２日　Ⅰ―Ｂ区掘削。抜根に種蝕。

11月４日　Ⅰ―Ｂ―Ａ区掘削完了。西側堀切の肩部でサヌカイト片出土。

11月５日　ＢⅡ・Ⅲを表土掘削開始。土橋に続く、テラス状の遺構を検出。

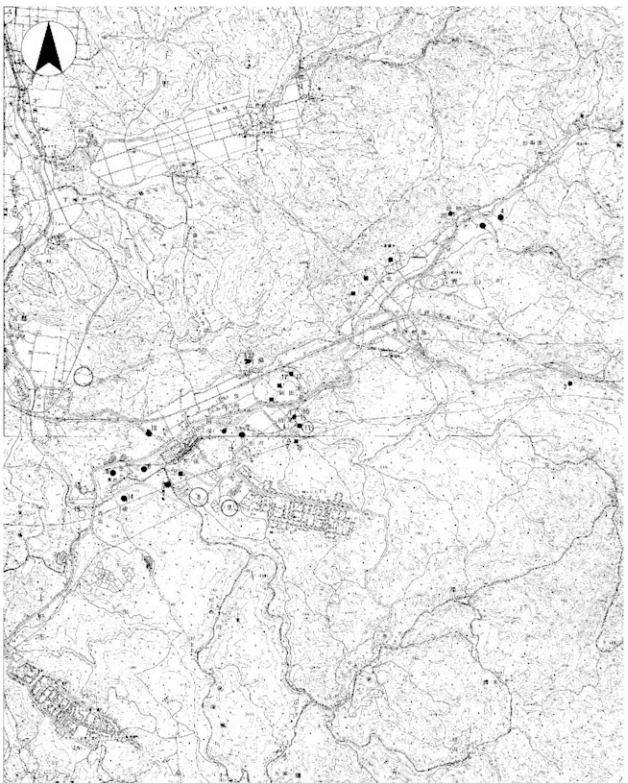
11月８日　ⅡＢ―Ⅱで古墳の周溝を改変と予想した通路跡を検出。ⅡＢ―Ⅲで集石遺構を確認、実測終了。無頭壺出土。

11月９日　ⅠＢⅡで掘削開始。ⅠＢⅢの集石遺構中、１石ずつ計量の後、取り上げ。

11月11日　検出した土坑について協議。
今後の計測と記録類について調整する。
11月17日　ベルコンの配置を換え、ＢⅣ区の掘削開始。古墳の周溝と予想した溝が連続、土師器片等が出土。
11月29日　Ａ区の掘削開始。ＢⅢ区の集石遺構の写真撮影と１石ごと取り外し。
12月１日　Ｂ地区の土層断面の写真撮影実施。
12月２日　ＢⅢ、ＢⅣ区の掘削実施。
12月７日　ＢⅣ区の掘削続行。階段状遺構は５段構成と判明。
12月９日　ＢⅣ区にて、帯曲輪を検出。南北畔の分層および写真撮影。
12月13日　Ｆ区掘削実施。横穴２カ所に縦断ポイントを設定。表土下に抱衣壺らしき土器出土。
12月15日　Ｆ区の掘削。階段状遺構の検出。
12月20日　Ｆ区の丘陵裾周り掘削。Ｄ８区検出の集石２の遺構写真撮影実施。
12月24日　Ｂ区の土層断面図作成。
12月28日　Ｆ区横穴８の土層断面写真撮影および実測。
１月６日　堀切を清掃。Ａ地区中央より下を地山まで掘削。東側で角礫が混在することから溝状遺構を想定。
１月７日　Ｂ地区頂上部の遺構を精査。墓坑および棺痕跡は確認できず。
１月13日　ラジコンヘリにて空中写真撮影実施。現地説明会準備を開始。
１月15日　午後１時より地元向け現地説明会開催。雨天ながら25名の参加者を得た。
１月20日　完掘後の地形測量を実施。主郭、帯曲輪、腰曲輪、通路跡、土坑等を順に計測。
１月21日　図面整理。遺構台帳作成と整理。現地調査終了。
＜岡田向遺跡調査日誌抄＞
11月13日　表土以下包含層まで、重機掘削開始。地区割りを協議、設定。
11月16日　包含層掘削終了。南端の攪乱が激しく、土層断面図作成後写真撮影し、埋め戻しを予定。
11月17日　包含層下に黒褐色粘質土層を検出。須恵器や瓦器椀が含まれる模様。
11月24日　Ａ１区～Ａ２区で、径20㎝の柱穴を検出。柱痕も残存。
11月26日　Ｂ１区～Ｃ２区の掘削。須恵器蓋・杯身、下駄・農具等木製品出土。
11月29日　Ｅ２、Ｆ２区を掘り下げ。最深で２ｍに及ぶ。櫓状の木製品出土。
12月２日　西壁及び北壁の土層を分層し、写真撮影終了。北側のＡ１～Ｂ３区までのPitを精査。木製品桶の出土状況写真撮影。
12月３日　Pitの半裁実施。平面図及び断面図作成。
12月６日　流路内の木製品の写真撮影と遺構カード記入終了。
12月10日　平面の遺構実測図作成。エレベーションを開始。
12月13日　深掘りで2.7ｍ下に湧水層を確認。以下崩落の危険性が大であることから検出中止。
12月15日　付近への影響を考慮し、早期に埋め戻しを決定。木製品搬出。

7　文化財保護法に関する諸通知

両遺跡ともに、以下の諸通知を提出している。
法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項
(県教育長宛)
平成16年９月10日付　教埋第187号
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知
(名張警察署長宛)
平成17年２月10日付　教埋第４－14号



1 岡田向遺跡　2 本田氏館跡　3 ナメリ石谷遺跡　4 勝地大坪遺跡　5 羽根中島遺跡
6 東出遺跡　7 柏尾銅鐸出土地　8 上代古墳群　9 桐ヶ谷古墳群　10 岡田向古墳
11　北の権現古墳群　12 手登古墳群　13 塚原古墳　14 中出向遺跡　15 小鴨氏城
16 岩野氏城　17 菊山氏城　18 沢代遺跡　19 西山遺跡　20 勝地中世墓　21 安田中世墓

0　2000m

第 1 図　遺跡位置図（1 ： 50,000）『この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（伊勢路、阿保）を掲載したものである。』

第２章　位置と歴史的環境

１　縄文時代

今回の岡田向遺跡（１）と本田氏館跡（２）周辺には、縄文時代から室町時代の遺跡が分布している。以下、順に記述したい。

旧青山町の縄文時代は上津村の伊勢地において、ナメリ石谷（３）が遺跡として最初に登場する。また、今回の両遺跡から東へ３kmの地点には勝地大坪遺跡（４）、旧青山町内には羽根中島遺跡（５）・東出遺跡（６）が分布している。それぞれ石鏃・石匙等生活の足跡が確認されている[1][2]。羽根中島遺跡では近年の調査で、縄文時代中期末～後期初頭の土器が数多く確認されている。このように人々の往来がさかんになるにつれ、文物交流も盛んになり次の弥生文化を創造する基盤が造られていく。

２　弥生時代

弥生時代になると、低位丘陵に囲まれたこの地域でも狭隘ながら水田耕作が営まれてくる。柏尾・岡田地域周辺にも生活の基盤がつくられる。旧青山町については後期以降、各地に集落が営まれてくる。

まず、柏尾地区では、昭和元年に弥生時代の壺形土器や土錘が発見されている。昭和初期になって地元本田氏の田普請が行われ、共同墓地近くにおいて「柏尾銅鐸」（７）が発見されている。これらは祭祀具としての用途も考えられ、農耕社会の芽生えと人々の生産活動の安定が伺える。

３　古墳時代

古墳時代に入ると、伊賀地域には全体で780基もの古墳が築造される。このうち当地域には107基の分布が認められる。ほとんどが６世紀の築造である。特に伊賀市比土所在の城之越遺跡からは、湧水点祭祀の行われた大溝跡やこれに伴う大型掘立柱建物が確認され、県指定文化財に認定されている。

この柏尾周辺では木津川右岸の平坦部から低位丘陵や左岸の後背丘陵地に後期古墳が集中している。

阿保地区には上代古墳群（８）、桐ヶ谷古墳群（９）のそれぞれ円墳と横穴墓が築造される。また、岡田地区には岡田向古墳群（10）などの方墳や円墳が確認されている。これらは直径10m程の円墳で、有蓋須恵器や直口壺や俵瓶が出土している[3][4]。

４　古代～中世

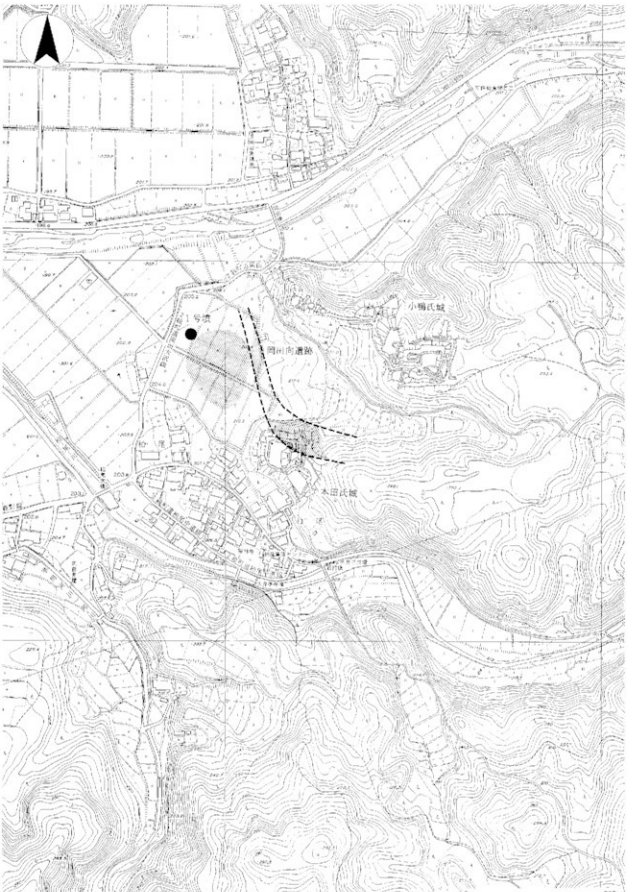
古墳時代の終わりから各地域に国家的なまとまりができると、伊賀の地でも豪族が権力の支配関係がうまれ始めた。特に地元で優勢であった氏族は阿部氏である。文献では、新撰姓氏録や古事記、日本書紀によると、「阿倍朝臣」「阿部臣」「伊賀臣」や「名張臣」「阿保朝臣」等の文字が伺える。阿部氏は伊賀北部を中心に勢力を誇った氏族で、北部地域に残る５世紀代の前方後円墳はこれらの有力氏族の権勢を振るった現れであろうと考えられている。

当時、伊賀は阿拝・山田・伊賀・名張の４郡に分かれて統括され、大和方面からの文物の流通も盛んになった。一方、街道では東海道が桜井から名張を抜け、小波田から伊賀上野方面へ抜けるルート、また、南伊勢方面へ抜ける街道では、阿保を通過する一志川口へのルートである。これを含め他２ルートが往復することになる。11世紀半ばころになると、当地域の田地も荘園制下に入り、阿保が藤原実遠によって統括される。この時期では集落遺跡としての西山遺跡（19）が知られていてこの時期の瓦器や土師器皿が出土している。中世に入ると強大な勢力は当地には見られないが、在地土豪の隆盛が伺える。本田氏（２）が地元土豪として権勢を振るった時代は、隣接して小鴨氏（15）や岩野氏（16）や菊山氏（17）が虚勢を張って、各氏ともに城館を築いていった。また、当地域には、中世墓も分布し、上流には勝地中世墓（20）や下流では安田中世墓（21）が知られる。

これ以降の歴史的な事象については、その他の文献に譲りたい。

【註】

1　「阿保」『日本地名辞典』角川書店、1998
2　「阿保」『三重県の地名』24　平凡社　1983
3　松本仁志『阿保山の歴史』青山文芸社1995
4　船越重伸他『羽根中島遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2001．3
5　中島千年他『岡田向遺跡発掘調査報告』青山町遺跡調査会，1986．3
6　竹内英昭他『中出向遺跡（第２次）発掘調査報告』―本文編―三重県埋蔵文化財センター　2001．3
7　『青山町史』青山町教育委員会　1986
8　『日本荘園制』平凡社2002



第２図　調査区位置図（１：5,000）　　（縄張図は『伊賀の中世城館』より引用）

第３章　岡田向遺跡の遺構

１．基本的層序

今回の調査区は小鴨氏域の西側、丘陵裾部に広がる岡田向遺跡の東端部に位置する。また、１号墳は調査地点に比較すると１段高い水田にある。調査区は殆どが場整備による相当の攪乱を受けていた。このため遺構検出は困難を極めた。

北半部は第１層が黒褐色粘質土（耕作土）、第２層は暗褐色粘質土（床土）、第３層灰黄褐粘質土（包含層）第４層褐灰色粘質土が堆積しており、第５層は褐灰色粘質（砂質土含む）で、この上面で、小穴や流路を確認した。南半部は第１層～第３層までは北半部と同層序で、第４層のみ、青灰色砂質土が堆積している。主に北側で検出したPit群は第４層上から掘り込まれている。ここで検出した建物等が機能しなくなって直後、流路自体も埋没したと考えられる。順に概説する。

２．遺　構

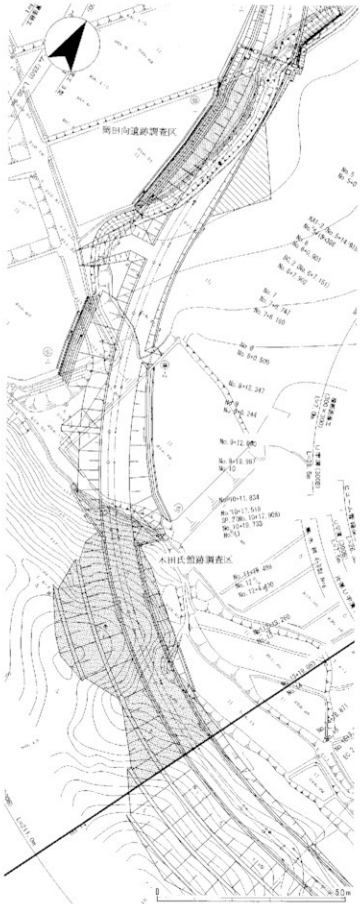
古墳時代の遺構

ＳＢ２　東西１間以上×南北１間以上の建物で、柱間寸法は、桁間は1.6m、梁間は1.0m前後である。柱穴は、掘形が60cmで深さは30cmである。柱痕も確認できた。径は20cmである。検出面から古墳時代後期の須恵器が出土している。

ＳＤ１　調査区の中央の中央部で検出した。最大幅は18m、深さ2.7mの流路である。東側の谷から連続するものであろう。地形から推察するに、この地点は流路の分岐点に相当し、木津川へ流入する支流と柏尾集落へ流入する流路にあたる。埋土からは、容器、運搬具、建築部材等多数の木製品が出土した。時期的にはＳＢ２と同様であると考えられる。

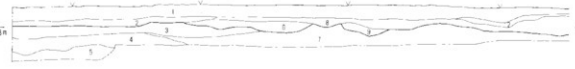
Ｂ２Pit３　直径は40cm、深さ30cmで、中央から柱痕が認められ、そこから地山に打ち込まれた部材も出土した。ＳＢ２と同時期の遺構と考えられる。

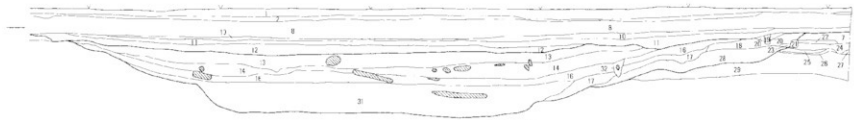
Ｂ２Pit６　直径は40cm、深さは20cm程であった。検出直後に、小礫10個ほどを中央部で確認した。これらは根石とも考えられる。中央で地山に打ち込まれたままの部材を確認した。時期確定できる土器は出土していないので、詳細時期は不明である。



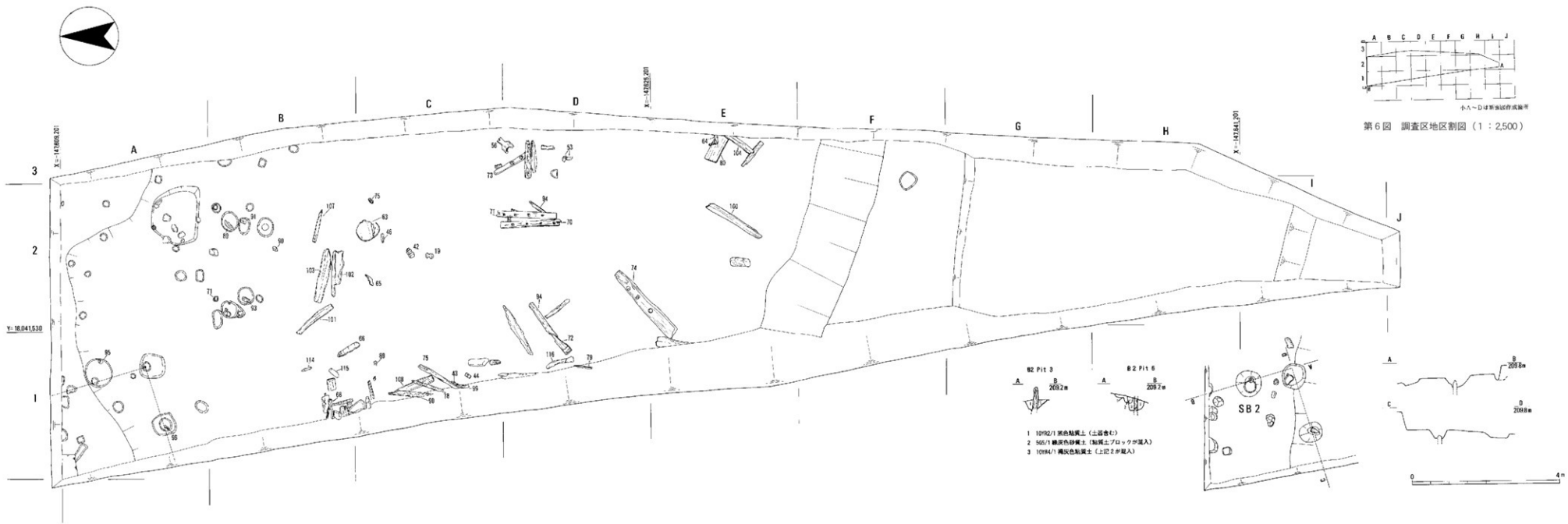
第３図　調査区配置図（１：1,000）

1　黒褐色粘質土（10YR3/1）（耕作土）
2　暗褐色粘質土（10YR3/3）明黄褐色粘質土ブロック礫を含む（床土）
3　青灰色砂質土（5 3G/1）φ2～5mmの砂、粘土ブロックを全体に含む
4　灰色シルト（5 3G/1）粗砂混じる
5　明黄褐色粘土　（10YR6/8）（地山）
6　緑灰色粘質土（10GY6/1）と細砂全体に層になる。粘土ブロック混入
7　青灰色シルトと（10BG5/1）、細砂・粗砂の互層





8　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）・炭合体に含む（包含層）
9　青灰色シルト（5 BG5/1）粗砂・礫が互層
10　青灰色細砂（5 BG6/1）φ3～50 mmの礫を多く含む
11　褐灰色粘質土（10YR4/1）砂質土含む（包含層）
12　黒褐色粘質土（10YR2/2）砂質土・炭少量含む
13　黒褐色粘質土（7. 5YR2/2）砂質土・炭少量含む
14　黒色粘質土（7. 5YR2/1）砂質土含む
（　広で緑灰色粘土ブロック、木製品を含む）
15　青灰色シルト（10BG5/1）
16　黒色粘質土（10YR2/1）炭・木製品を多く含む
17　緑灰色粘質土（10GY5/1）砂質土含む
18　灰オリーブ色粘質土（5 Y6/2）砂質土含む（構出面）
19　黒褐色粘質土（10YR3/1）（ｐｔ埋土）
20　灰褐色粘質土（10YR4/1）（ｐｔ埋土）
21　緑灰色砂質土（10G6/1）（ｐｔ埋土）
22　オリーブ灰色土（5 BG6/1）φ5mmの砂を含むシルト
23　オリーブ灰色土（2. 5GY6/1）φ2～5mmの砂を含む
24　灰黄褐色シルト（10GG/2）φ2～5mmの砂が混じる
25　青灰色砂質土（5 BG6/1）粗砂φ10 mmの礫を含む
26　黄橙色粘土（10YR8/8）
27　緑灰色シルト（5 GS/1）粗砂含む
28　オリーブ灰色シルト（5 GY5/1）
29　青灰色シルト（10BGS/1）
30　青灰色シルト（10BG5/1）φ5～15 cmの礫を多く含む
31　灰褐色粘質土（10YR2/2）粗ほ・木質遺構物を含む
32　黒褐色粘質土（7. 5YR2/2）（ｐｔ埋土）



第６図　調査区地区割図（１：2,500）

第５図　岡田向遺跡遺構平面図、ＳＤ１・ＳＢ２実測図、Ｂ２Pit３・６断面図（１：100）

第４章　岡田向遺跡の出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、そのほとんどがＳＤ１から出土している。土師器、須恵器等の土器類がコンテナパットで19箱、多種多量に出土した木製品は15箱である。木製品の内訳は、建築部材38点、農具10点、紡織具２点、容器５点、杭等が５点、雑具２点、用途不明品15点である。

以下、概略を順に記述する。

１．ＳＤ１出土土器

１～21は、古墳時代の須恵器で、１～５・17が杯蓋、６～12が杯身、14が脚付長頸壺、15～16が高杯、19～20が甕である。このうち、杯身６は立ち上がりが大きく、底部が扁平でロクロケズリも丁寧で、５世紀末から６世紀初頃に遡るであろうが、他はいずれも６世紀以降である。12・13には、底部に「×」のヘラ記号が認められる。脚付長頸壺14は、壺部の肩の張りが弱く、やや古相を示す。高杯は、15が短脚、16が長脚２段透である。

21～30は、飛鳥時代から奈良時代の須恵器である。21は大甕、22～24は杯蓋、25～30が杯身である。大甕21は内面に墨痕がわずかに認められ、転用硯と考えられる。30は非常に大きな杯身で、底径は21.5㎝を測る。

31～33・34～37は飛鳥時代から奈良時代の土師器類（34のみ古墳時代に遡る可能性あり）で、31～32は杯、33は皿、34は椀、35～37は甕である。皿33にはかすかに螺旋状暗文の痕跡が認められる。

甕はいずれもハケ調整で、口縁端部を摘み上げるもので、36は長胴甕であろう。

37は、弥生土器壺である。近傍にあったものが混入したものと思われる。

38～40は瓦器である。38は瓦器皿で、底部内面に暗文が施されている。39は瓦器椀で外面に横方向に筋状のミガキが、内面に口縁から下に底部までのミガキが緻密に施されている。40も瓦器椀の底部破片であり、螺旋状のミガキが認められる。

２．ＳＤ１出土木製品

後述する自然科学分析には77点を抽出し、切片を採取後、器種を判別し、樹種同定を行い、保存処理を実施した順に記述する。

下駄（42・43）

長さ、幅共に異なり、対にならない。鼻緒の取付孔から共に右足用であろう。脚台端部ほど激しく磨り減っている。42は細身で、残存状況は良好である。枢目を使用している。台と歯に段のない組み合わせは六大Ａ遺跡分類のＢ２類に相当する。43は、幅広で、使用痕が明瞭である。歯と台の間に段をもつ部分は六大Ａ遺跡分類のＡ３類である。ともに原材料にはスギである。

木錘（44）

丸太材の中心を外した位置に穿孔を施して紐通し孔としたもので、「木器集成」の５類、六大Ａ分類のＢ類である。材質は、ヒノキ。

紡錘車（45）

やや大きいが、紡錘車であろう。中央に向けて斜め方向に削り込んだ調整痕が認められる。スギ。

杓型木製品（47）

柄が殆ど欠落している。日用雑器の類ではこれ１点のみ確認しただけである。

棒状具（48～51）

49・50は断面円形で、ともに面取り加工を施している。48は片端部を細く削り出しており、別材に差し込むための調整を行っている。

曲物（52～54・63）

52は底板で、側縁から木釘が打ち込まれているほか、円周に沿って小円孔が穿たれており、底裏からも木釘で止めたと思われる。材質はヒノキである。63は、ＳＤ１の護岸から倒立して出土した遺物である。直径が62㎝、深さは７㎝である。側板と底板は、木釘で接合されていた。接合部には２㎜の孔が等間隔に開けられ、各部を桜皮で接合したものである。３カ所で樹皮が付着していた。

把手付槽（55）

破片になっているが、出土遺物のうち最も良好な残存状態であった。側面から斜め方向に角材（把手）を挿入して使用したとみられる。把手は確認できなかった。

案（56～57）

57は、残存状態が良好である。天板は加工の容易なヒノキの柾目を使用している。脚部は、一辺が３㎝の角材で、この部材は、天板の裏面に開けられた木口に挿入された状態で出土した。もう一方は抜け落ちて認められない。56は大きな案脚の未製品である。上・下部に加工が施されている。

武器形木製品（59・62）

剣状であるが把の表現から刀形であろう。

先尖棒（58・60・61）

先端が尖るなど当初は武器形の範疇で考えたが、断面形が円形となるなど確定するには至らなかった。61は先端が斜めに切り落とされている。

曲柄又鍬（64～65・67）

64は曲柄鍬の反柄、65はナスビ形曲柄又鍬である。65はアカガシ属に類する材で製作されており、笠部の下が鋭く抉

り込まれており、古墳時代後半以降の形態を示している。67も又鍬の刃部であろう。

紡織具（66）

綿打具であろう。中央部の抉り部は、いわゆる「アリ溝」状を呈する。材質はユキノシタに属する。

竪杵（68）

出土時には掘部から2分割した状態であった。この接点も一部欠落している。使用時は全長が80cmほどの遺物であったと考えられる。先端部に擦面が認められる。

長方板（69）

長方形の板目材である。中央左に8mmの小孔が開けられている。

槌（70～71）

ともに脚部で160cmを超える。先端が、スキー板状に角が丸められている。側面には5箇所に木口が穿たれていて、この部分に横方向の横桟木が差し込まれていたと考えられるが、桟木は残存しない。近隣では、伊賀市上神戸の高賀遺跡で類例がある。

梯子（72）

残存長168cmを測る。上面の右側に1段目のエグリが施されている。他の部位には認められないため未製品である。

横架材（73～74）

73はヒノキで、方形孔が多く穿たれている。図中最上部の2個一対の小方孔は固定のため縄で緊縛するための紐通し孔であろう。74はマツ材で、73よりも小さな円孔が開く。

柱材（76・77・78・84・88～98）

77は、頂部に出ホゾが造り出されており、横架材を差し込んで固定するための仕口と思われる。下部は腐食が激しく、この部分から土中に埋められていた可能性がある。掘立柱建物の柱材であろう。82も77同様、端部に出ホゾをもつが、本体の表面が面取りされており、柱材にはならないかもしれない。84は表面に樹皮を残す。材質はマツ科に属する。

垂木？（87）

樹皮が残る細い棒状材で、片側端部に抉りがある。欠損しているため確定できないが、垂木として用いられた可能性があろう。

板材（79～80・99～106）

79は側縁部に小円孔、80は潜り孔が穿たれている。80は側縁の有孔部が薄く削がれており、ここに同材を2枚重ねて緊縛したと推定される。

残材・杭等（76・85・87・112～117）

76は長さを揃えるためか、何かを製作するために切り落としたものであろう。

3．包含層出土土器

118は調査区内においては1点のみ確認した、高杯である。杯底部から屈曲して口縁にかけて八の字に開く。端部は、若干内側につまみ上げられて収まる。古墳時代の遺物と考えられる。

119は須恵器高杯の杯部残片である。おそらく長脚透かしの高杯になろう。

120～122は杯蓋、124～128は杯身である。127・128は扁平で、口縁からの立ち上がりも短く、内傾する。時期的には古墳後期の後半頃に相当すると考えられる。

130～134は杯Bである。130～132の高台は屈曲部からやや離れて貼り付けられている。これに対して133・134は屈曲部寄りに付けられている。

136は土師器杯Bである。内面に放射状暗文が1段施されている。高台は比較的高く、屈曲部に貼り付けられている。奈良時代初頭ころに該当する。

137～140は土錘である。

141はサヌカイト製の石槌である。右側縁ほど細かい調整剥離痕が認められる。全体に若干の風化がある。

142・146は瓦器皿である。142の内面には螺旋状のミガキが施されている。146には密に斜格子状のミガキが認められる。どちらも中期ころの遺物である。

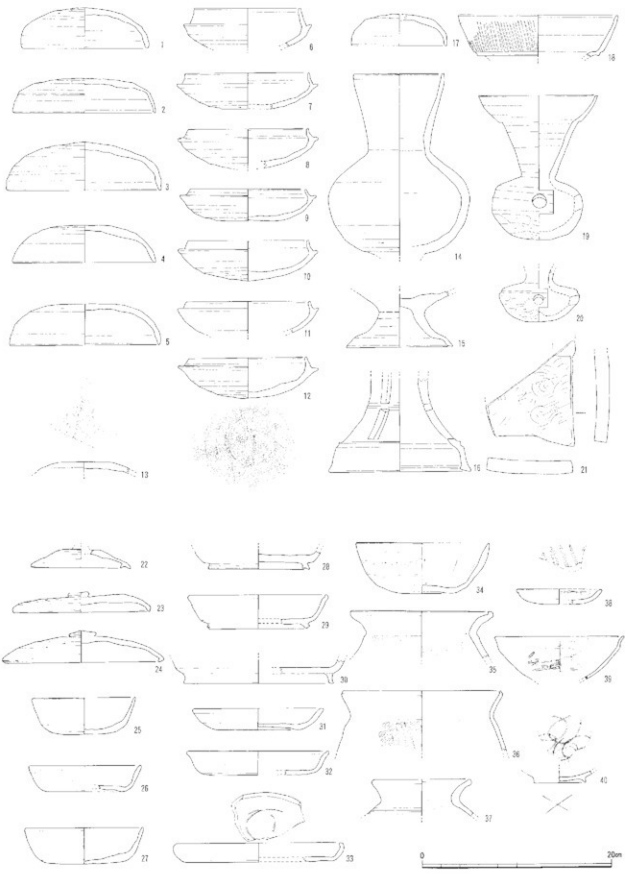
143・144・147は土師器甕である。144の口縁は若干外反気味であるが、端部は上方に摘み上げられる。

149は頸部でやや内湾気味に立ち上がり、端部はヨコナデされて、若干内側で丸みを持つ。150は大型品である。口径は28cmである。内外面ともに頸部下に斜行のハケメが施されている。

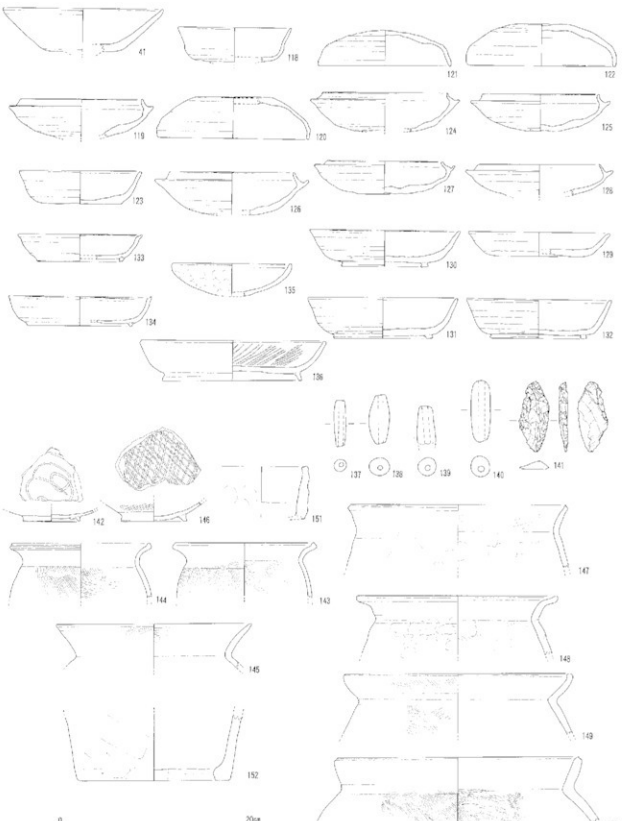
145は古墳時代の甕かとも考えられる。151は製塩土器である。152は陶器甕で、底部に透孔が1カ所認められる。

155・156は土師器杯Aである。底部から口縁にかけての屈曲はややS字気味に外反する。底部はどちらも肥厚する。奈良時代の後期以降の遺物である。

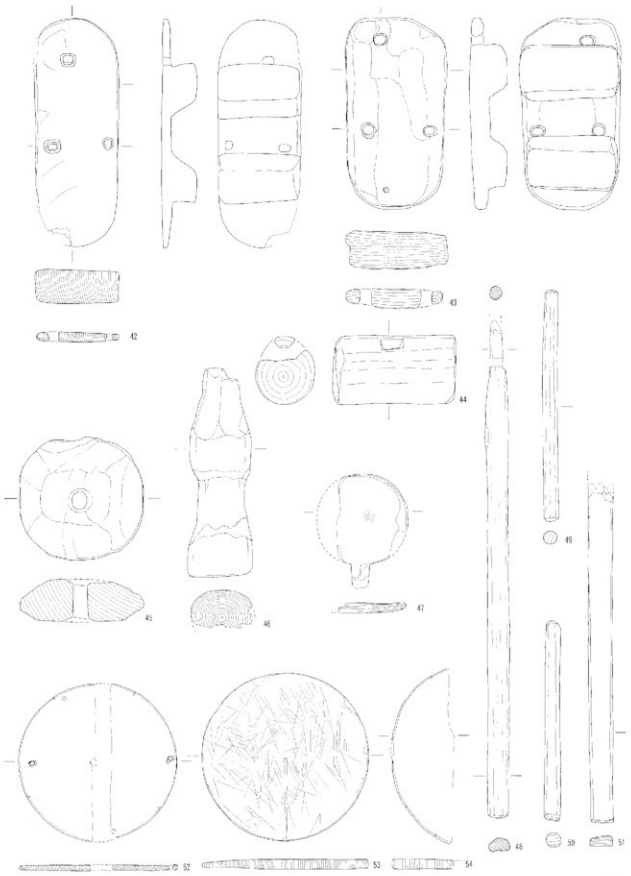
【参】
1　穂積裕昌「木製品の解説」『六大A遺跡発掘調査報告』（木製品編）　三重県埋蔵文化財センター　2000.3
2　中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の編年的研究」『陶邑Ⅰ』大阪府教育委員会1978
3　田辺昭三ほか『陶邑古窯址群。』平安学園考古クラブ1966
4　「木器集成図録　近畿原始編」『奈良国立文化財研究所　資料』第36冊　1993
5　樋上昇　「耕作のための道具―ナスビ型農耕具を中心に―」『季刊考古学』47　1994
6　『鬼虎川遺跡調査概要』遺物編　木製品　（財）東大阪市文化財協会1988
7　「第5章考察、弥生時代の槌」『鬼虎川の木製品』―第7次発掘調査報告書第4冊―（財）東大阪市文化財協会1987
8　穂積裕昌「3．高賀遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』―第3分冊―三重県埋蔵文化財センター1995



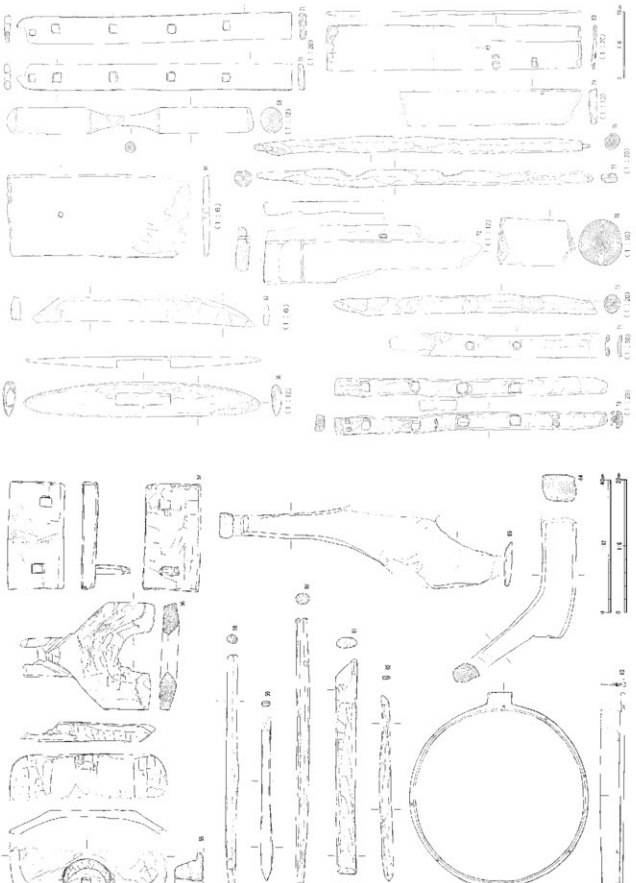
第７図　出土遺物実測図（1）（1：4）



第８図　出土遺物実測図（２）（１：４）

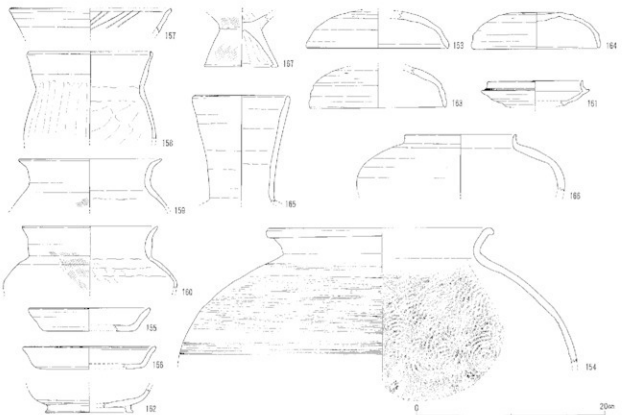


第９図　出土遺物実測図（３）（１：４）



第10図　出土遺物実測図（4）（1：6他　縮尺は図中に示す）

第11図　出土遺物実測図（5）（1：6他　縮尺は図中に示す）



第12図　出土遺物実測図（6）（1：4）

番号	実測番号	器種	器形	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	011-06	須恵器	杯蓋	D3	SD1	(口)13.4 (器高)4.3	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰黄色2.5Y7/2 灰白色N7/0	口縁5/12	内面煤付着
2	016-03	須恵器	杯蓋	C2	SD1	(口)15.0 (器高)3.7	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N5/0	口縁1/12	
3	014-01	須恵器	杯蓋	C1	SD1	(口)16.3 (器高)5.1	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁4/12	
4	012-02	須恵器	杯蓋	B1	SD1	(口)15.0 (器高)3.9	外：ヘラ切り→ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	口縁1/12	天井部裏面に当て具痕跡あり
5	013-02	須恵器	杯蓋	D1	SD1	(口)15.9 (器高)4.3	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0 黄灰色2.5Y4/1	口縁4/12	
6	009-02	須恵器	杯身	B2	SD1 (黒色粘質土)	(口)11.2 (受径)13.4	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N6/0	口縁4/12	
7	016-04	須恵器	杯身	C1	SD1	(口)13.0 (器高)3.8	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色2.5Y4/1 灰色N4/	口縁3/12	
8	015-01	須恵器	杯身	B2	SD1	(口)12.7	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	黄灰色2.5Y5/1	口縁4/12	
9	011-04	須恵器	杯身	C2	SD1	(口)12.2 (器高)3.4	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	完存	
10	012-01	須恵器	杯身	B1	SD1	(口)12.6 (器高)4.2	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色5Y5/1 褐灰色7.5YR5/1	ほぼ完存	口縁端部全体に研磨痕跡あり
11	009-01	須恵器	杯身	B2	SD1 (黒色粘質土)	(口)13.2 (受径)14.8	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N5/0	口縁8/12	
12	011-05	須恵器	杯身	B2	SD1	(口)12.3 (器高)4.3	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N4/0	口縁11/12	ヘラ記号「×」
13	016-06	須恵器	杯蓋	B1	SD1	−	外：ヘラギリ→ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗	灰色N5/	天井部残片	ヘラ記号「丨」あり
14	014-04	須恵器	長頸壺	C2	SD1	(口)9.6 (体径)15.0	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ→指オサエ	密	灰色N5/0	口縁4/12	接合部に透かしあり
15	011-02	須恵器	高杯脚部	D2	SD1	(底)11.2	外：ロクロナデ→ナデ 内：ロクロナデ→ナデ	密	灰色N5/0	底部4/12	
16	012-03	須恵器	器台	B1	SD1	(底)15.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	底部2/12	2段透かし
17	010-02	須恵器	杯蓋	E2	SD1	(口)10.1 (器高)3.3	外：ヘラケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰白色N7/0	口縁3/12	
18	016-05	須恵器	瓦泉	E3	SD1	(口)17.0	外：ロクロナデ→ヘラケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N4/ 灰色N6/	口縁2/12	カキメ
19	011-01	須恵器	瓦泉	C2	SD1 (黒色粘質土)	(口)12.7 (器高)15.2	外：ロクロナデ→ナデ後ヘラケズリ→ナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁9/12	
20	013-01	須恵器	瓦泉	C2	SD1 取上No5	(体部径)8.5	外：手持ちヘラケヅリ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	胴部以下残	穿孔1カ所
21	013-06	須恵器	甕(胴)	D1	SD1	(縦)10.1 (横)9.3	外：タタキ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	体部残片	
22	010-03	須恵器	蓋	B3	SD1	(口)10.6	外：ヘラケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰白色N7/0 灰色N6/0	口縁4/12	ツマミ欠損
23	011-03	須恵器	蓋杯	C2	SD1	(口)14.5 (器高)2.1	外：ロクロナデ→ナデ 内：ロクロナデ→ナデ	密	灰色N6/0	口縁6/12	転用硯，墨付着
24	009-07	須恵器	杯蓋	C1	SD1	(口)17.2 (器高)3.35 (ツマミ径)2.9	外：貼り付け後ナデ→ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	灰色N5/0	口縁2/12	
25	013-05	須恵器	杯	E2	SD1	(口)11.0 (器高)3.8	外：ロクロナデ→ロクロケズリ→ヘラ切り後ナデ 内：ロクロナデ	密	灰白色N7/0	口縁1/12	
26	009-04	須恵器	杯	A2	SD1	(口)12.0 (器高)2.75	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0 灰色N5/0	口縁1/12	
27	009-06	須恵器	杯	C1	SD1	(口)12.6 (器高)3.8	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	灰白色2.5Y7/1	口縁3/12	
28	009-03	須恵器	杯	F2	SD1	(台径)10.7	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N8/0	台部4/12	裏面に墨痕跡
29	017-05	土師器	杯	C2	SD1	(口)16.4 (器高)3.6	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ→ロクロナデ 内：ロクロナデ→ヨコナデ	やや密	灰白色10YR8/2	口縁2/12	
30	012-04	須恵器	杯	C2	SD1	(台径)15.8	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ→糸切り 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0 灰色N5/0	底部3/12	
31	017-04	土師器	皿	C1	SD1	(口)13.8 (器高)2.2	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	粗	にぶい橙色5YR6/6 灰白色10YR8/2	口縁2/12	
32	009-05	土師器	皿	C1	SD1	(口)15.0 (器高)2.5	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	やや粗	浅黄橙色7.5YR8/3	口縁2/12	
33	017-06	土師器	皿	C1	SD1	(口)18.0 (器高)2.0	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→暗文→ナデ	やや密	淡橙色5YR8/4 灰白色10YR8/2	口縁1/12	螺旋状暗文
34	012-05	土師器	杯	C2	SD1	(口)14.0 (器高)5.3	外：ヨコナデ→指オサエ，ナデ 内：工具ナデ	密	灰黄褐色10YR6/2	口縁9/12	
35	017-02	弥生土器	壺	B2	SD1	(口)10.4	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→工具ナデ	やや粗	橙色7.5YR7/6	口縁2/12	
36	012-06	土師器	甕	C2	SD1	(口)15.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ	密	灰白色2.5Y8/1	口縁2/12	
37	005-02	土師器	甕	B2	SD1	(口)16.6	外：ヨコナデ→タテハケ 内：ヨコナデ→ナデ指オサエ	やや粗	褐灰色10YR4/1	口縁4/12	1701と接合
38	010-06	瓦器	皿	D3	SD1	(口)9.0 (器高)1.6	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	密	灰色N5/0 灰白色N8/0	口縁3/12	
39	010-05	瓦器	椀	D3	SD1	(口)13.6	外：ヨコナデ→ナデ→指オサエ 内：ヨコナデ→ミガキ	密	灰色N4/0 灰白色N8/0	口縁1/12	
40	010-04	瓦器	椀	A1	SD1	(台径)5.4	外：ロクロナデ→貼り付け後ナデ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N4/0 灰白色N8/0	台部6/12	螺旋状暗文
41	002-04	土師器	高杯(杯部)	B2	SD1	(口)16.9 (器高)4.5	外：ナデ 内：ナデ	密	にぶい橙色5YR6/3 にぶい赤褐色5YR5/3	口縁2/12	

第１表　遺物観察表

番号	実測番号	器種	器形	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
118	004-05	須恵器	高杯	D 2	包	(口)12.0	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	灰色5Y5/1	口縁1/12	高杯か？
119	015-04	須恵器	杯	B 2	包	(口)12.8 (底)8.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰白色2.5Y7/1	小片残	
120	005-03	須恵器	杯蓋	C 2	包	(口)15.8 (器高)4.4	外：ケズリ→ナデ 内：ロクロナデ	やや密	黒色N2/ 褐灰色10YR6/1	口縁2/12	
121	016-02	須恵器	杯蓋	C 1	包	(口)14.0 (器高)3.7	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰色N6/0 灰色N5/0	口縁2/12	
122	013-03	須恵器	杯蓋	D 1	包	(口)16.0 (器高)4.4	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
123	015-02	須恵器	杯身	B 2	包	(口)12.8	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁3/12	
124	003-04	須恵器	杯身	B 2	包	(口)13.2	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色7.5Y5/1	口縁3/12	
125	003-03	須恵器	杯身	B 2	包	(口)12.5 (器高)3.9	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁4/12	
126	015-03	須恵器	杯身	B 2	包	(口)13.2	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N4/0	口縁3/12	
127	014-03	須恵器	杯身	C 1	包	(口)12.4 (器高)3.4	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁3/12	
128	004-03	須恵器	杯身	C 2	包	(口)14.8	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/	口縁2/12	
129	008-02	土師器	皿	D 2	包	(口)15.0 (器高)2.5	外：ヨコナデ→工具ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/3 灰褐色7.5YR4/2	口縁1/12	
130	003-02	須恵器	杯	B 2	包	(口)16.0 (器高)3.85	外：ナデ→ロクロケズリ→貼り付け後ナデ 内：ナデ	密	灰色N5/0	底2/12	
131	002-01	須恵器	杯	B 1	包	(口)15.8 (器高)4.3	外：ロクロナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
132	002-02	須恵器	杯	B 1	包	(口)15.4 (器高)4.1	外：ロクロナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	灰色N6/0	口縁2/12	
133	005-04	土師器	杯	C 3	包	(口)13.0 (器高)2.8	外：ヨコナデ→貼り付けナデ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや粗	にぶい橙5YR7/4 浅黄橙色7.5YR8/3	口縁2/12	高台貼付部裏面に沈線を施す
134	002-03	土師器	杯	B 1	包	(口)15.0 (器高)3.1	外：ロクロナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ 内：ヨコナデ	密	にぶい橙色5YR6/4	口縁2/12	高台貼付部裏面に沈線を施す
135	001-05	土師器	椀	B 1	包	(口)12.6 (器高)3.4	外：ヨコナデ→ナデ→指オサエ 内：ヨコナデ→ナデ	密	にぶい黄橙色10YR6/3	口縁3/12	
136	005-01	土師器	杯	B 1	包	(口)19.4 (器高)4.2	外：ヨコナデ→ミガキ→貼り付け後ナデ 内：ヨコナデ→暗文→ナデ	やや密	浅黄橙色7.5YR8/4	口縁6/12	
137	008-06	土師質	土錘	A 1	包	(長)4.8 (幅)1.35	外：ナデ→オサエ	やや粗	褐灰色10YR4/1 黄灰色2.5Y5/1	完存	
138	008-05	土師質	土錘	A 2	包	(長)5.1 (幅)2.15	外：ナデ→オサエ	やや粗	褐灰色10YR5/1 灰色N4/0	完存	
139	008-07	土師質	土錘	A 1	包	(長)4.1 (幅)1.9	外：ナデ→オサエ	やや粗	にぶい黄橙色10YR7/3	半分折損	
140	008-04	土師質	土錘	C 1	包	(長)6.5 (幅)2.15	外：ナデ→オサエ	粗	灰黄色2.5Y7/2 暗灰色N3/0	完存	
141	004-06	石器	UF	C 3	包	L＝7.4, W＝3.2, H＝1.0					
142	002-05	瓦器	椀	B 2	包	(高台径)6.0	外：ナデ→貼り付け→ヨコナデ 内：ナデ→螺旋文	密	にぶい黄橙色10YR7/3	底8/12	
143	001-03	土師器	甕	B 1	包	(口)15.2	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ	密	灰白色2.5Y8/1	口縁3/12	内面に炭化物付着
144	001-04	土師器	甕	B 1	包	(口)15.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ	密	灰白色2.5Y7/1	口縁4/12	
145	008-01	土師器	甕	D 2	包	(口)20.6	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ナデ	やや粗	にぶい褐色7.5YR6/3 灰黄褐色10YR6/2	口縁2/12	
146	005-05	瓦器	椀	C 3	包	(底)7.0	外：ヨコナデ→ミガキ→貼り付け後ナデ 内：ヨコナデ→暗文	やや密	灰白色2.5Y8/2	底部2/12	
147	004-01	土師器	甕	B 2	包	(口)23.0	外：ヨコナデ→ヨコハケ 内：ヨコハケ→ナデ	やや密	にぶい橙色5YR7/3 灰色2.5Y8/2	口縁3/12	外面に煤少量残る
148	001-02	土師器	甕	B 1	包	(口)21.2	外：ヨコナデ→指オサエ→ナデ 内：ヨコナデ→ヨコハケ→ナデ	密	にぶい褐色7.5YR5/4	口縁3/12	
149	002-06	土師器	甕	B 2	包	(口)24.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ	密	にぶい黄橙色10YR7/3	口縁1/12	内面煤付着
150	001-01	土師器	鍋	B 1	包	(口)26.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ	密	外：灰黄褐色10YR5/2 内：	口縁1/12	
151	008-03	土師質	製塩土器	E 3	包	(器高)5.5	外：ヨコナデ→指オサエ 内：ヨコナデ	やや密	明赤褐色2.5YR5/6	口縁残片	
152	004-02	須恵器	甑	C 3	包	(底)16.0	外：ケズリ→ヨコナデ 内：回転ナデ→ケズリ（透かし）	密	灰色N6/	口縁6/12	
153	013-04	須恵器	杯蓋	D 1	包	(口)15.1	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
154	007-01	須恵器	甕	D 2	包	(口)24.0	外：ロクロナデ→カキメ 内：ロクロナデ→タタキ	密	灰色N4/0	口縁10/12	自然釉が全体にかかる
155	006-04	土師器	杯	C 3	包	(口)12.8 (器高)2.45	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	粗	灰白色10YR8/2 にぶい橙色7.5YR6/4	口縁2/12	
156	006-05	土師器	杯	C 3	包	(口)14.0 (器高)2.40	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	やや粗	灰白色10YR8/2	口縁2/12	
157	006-03	土師器	杯	C 3	包	(口)17.0	外：ヨコナデ→ナデ 内：ヨコナデ→暗文	やや密	外：淡赤橙色2.5YR7/4 内：浅黄橙色10YR8/3	口縁1/12	放射状暗文あり
158	006-06	土師器	甕	D 2	包	(口)12.8	外：ヨコナデ→工具ナデ 内：ヨコナデ→ナデ	やや密	暗灰色N3/	口縁1/12	外面全体が被熱する
159	006-01	土師器	甕	B 2	包	(口)15.0	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ハケメ	やや粗	黒褐色10YR3/2 にぶい黄橙色10YR6/3	口縁4/12	
160	006-02	土師器	甕	D 2	包	(口)14.2	外：ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ→ナデ後指オサエ	やや粗	にぶい黄橙色10YR7/2	口縁2/12	内面に黒色部分あり
161	004-04	須恵器	杯身	C 3	包	(口)10.3	外：ハケ→ナデ 内：ハケ→ナデ	やや密	灰色N6/	口縁1/12	外面に黒斑あり
162	003-01	須恵器	杯	B 2	包	(高台径)9.2	外：ナデ→ロクロケズリ→貼り付け後ナデ 内：ナデ	密	灰色N6/0	口縁4/12	ヘラ記号有りか
163	010-01	須恵器	杯蓋	E 2	包	(口)14.5	外：ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	灰色N5/0	口縁5/12	
164	016-01	須恵器	杯蓋	B 2	包	(口)13.2 (器高)3.2	外：ヘラギリ→ロクロケズリ→ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや粗	灰色N7/0	口縁4/12	
165	015-05	須恵器	長頸壺	B 2	包	(口)10.3	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0 灰色N4/0	口縁10/12	
166	014-02	須恵器	短頸壺	C 1	包	(口)11.8 (体径)22.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	灰色N5/0	口縁2/12	
167	017-03	土師器	台付甕	A 1	包	(底径)7.8	外：縦ハケ→横ハケ 内：ヨコナデ	やや粗	灰黄色2.5Y6/2	底部完存	

第２表　遺物観察表

番号	実測番号	器種	材質	グリッド	遺構・層位	取上番号	計測値 長 ・ 幅 ・ 厚(高) cm	木取り	残存度	特記事項
42	007－01	下駄	スギ	C 2	SD 1 黒色粘質	2	24.1 8.8 3.6	柾目	ほぼ完存	
43	012－01	下駄	スギ	C 1	SD 1 黒色粘質	9	20.2 10.7 3.9	板目	ほぼ完存	小人用か
44	005－01	木錘	ヒノキ	C 1	SD 1	3	12.8 7.0 6.2～7.0 (小孔2.1, 1.1)	芯材	完存	
45	022－01	絡錘車	スギ	C 2	SD 1 黒色粘質	7	13.15 12.9 4.5 孔 φ1.9	辺材	完存	
46	002－02	木錘	ツバキ	C 2	SD 1 黒色粘質	8	22.1 6.9 4.1	芯材	完存	
47	022－02	杓形木製品	スギ	C 3	SD 1 黒色粘質		12.15 7.6 1.1	辺材	柄欠落	
48	029－04	棒状具	ヒノキ	D 2	SD 1 黒色粘質		52.4 2.2 1.4	芯材	完存	先端細く削り、折損。
49	031－03	棒状具	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		24.5 φ1.4	芯材	完存	面取加工有り。
50	031－04	棒状具	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		21.1 φ1.5	芯材	完存	面取加工有り。
51	021－01	角形棒状具	ヒノキ	C 3	SD 1 黒色粘質		35.95 2.45 1.1	柾目	完存	
52	032－01	曲物底板	ヒノキ	D 2	SD 1		16.8 0.6	柾目	半分残存	3孔の内1孔は貫通せず。木釘孔4カ所。半部で割れ。
53	002－01	曲物底板	ヒノキ	D 3	SD 1 黒色粘質	5	17.6 1.1 (側面に孔5箇所) 工具のアタリ痕有り	柾目	一部欠	
54	006－03	曲物底板	ヒノキ	C 1	SD 1		18.4 6.5 1.1	柾目	半分残存	栓が残存(左縁部)
55	001－01	柄付容器(槽)	ヒノキ	C 1	SD 1 黒色粘質		46.9 14.0 8.5	芯材	推定半分	孔1：2.7 w：2.6 幅行3.0
56	004－01	案(未整)	ヒノキ	D 3	SD 1 黒色粘質	1	40.3 32.3 6.1	板目	未製品	上下端にチョウナのハツリ痕有り。
57	011－01	案	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質	3	32.2 17.0 4.45 (脚1.4.7 2.7 4.0)	板目	脚欠	脚部1本残存。上面に工具のアタリ痕。
58	009－02	先尖棒	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		36.7 1.55 1.3	芯材	ほぼ完存	
59	021－02	撥形木製品	ヒノキ	E 2	SD 1 黒色粘質		24.65 1.7 柄 φ0.7	辺材	完存	後部が折損。
60	021－03	先尖棒	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		42.4 2.0 1.65	辺材	ほぼ完存	
61	029－02	先尖棒	スギ	E 2	SD 1 黒色粘質		32.4 3.1 1.9	辺材	完存	右端が折損。
62	029－03	剣形木製品	イヌマキ	E 2	SD 1 黒色粘質		28.0 1.7 0.7	辺材	完存	
63	035－01	桶	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質	9	52.0 5.3～6.0 底板 φ58.5 側板厚0.5	柾目	底板端部欠	孔6カ所、樹皮残る。
64	003－01	曲柄鍬柄装着部	モクレン	E 3	SD 1 黒色粘質	1	21.8 5.1 装着部厚3.9 柄厚2.6	芯材	基部欠損	
65	008－01	曲柄又鍬	アカガシ	C 2	SD 1 黒色粘質	1	38.5 柄幅3.75 先6.6 厚2.1	柾目	半分残存	
66	014－01	綿打具	ノリウツギ	B 1	SD 1	3	71.9 10.3 3.4 (挿入部16.5 3.6 2.5) 孔 φ0.4	柾目	刃部残	中央に木釘孔有り。
67	032－02	曲柄鍬柄	アカガシ	B 1	SD 1		32.5 3.15 0.9 (右端3.65 1.40)	柾目	柄一部残	
68	005－03	堅杵	ツバキ	B 1	SD 1 黒色粘質		(80.0) 握部 φ3.2 叩部 φ7.7	丸太	握部一部欠	握部で2分割。
69	030－01	長方板	ヒノキ	C 2	SD 1 黒色粘質		27.5 12.2 0.6～1.0	辺材	一部残	中央左に小孔 φ0.8
70	017－01	櫓	ヒノキ	D 2	SD 1 黒色粘質	2	164.3 15.2 3.5 (角孔5.0 4.0)	辺材	船)走部の残	角孔4カ所有り。
71	017－02	櫓	ヒノキ	D 2	SD 1 黒色粘質	1	168.6 16.0 4.0 (角孔5.0 4.0)	辺材	船)走部の残	角孔4カ所有り。先端に幅行5cm、巾3.3の差込部有り。
72	013－01	棒子	スギ	D 1	SD 1	4	65.4 17.3 4.0 孔1.1 2.41	柾目	半分残	上端1段目の抉り加工。
73	010－02	横架材	マツ	D 3	SD 1 黒色粘質	2	59.6 9.65 6.1 (入孔6×5, 小孔2.5×3.0)	芯材	一部残	015 01の部材と接合。
74	015－01	横架材	マツ	D 3	SD 1 黒色粘質		117.5 10.3 6.8 (孔6.3 6.5 小孔3.5 2.5)	芯材	一部残	010 02の部材と接合。
75	018－01	横架材	マツ	E 2	SD 1 黒色粘質	1	242.2 29.0 5.0 (角孔3.0 円孔 φ3.8)	柾目	一部残	上端に調整痕。
76	023－01	杭材	マツ	C 1	SD 1	6	157.5 φ11.0 (抉り：巾12.0～13.0cm)	丸太	一部残	抉り2カ所巾12.0～13.0cm、全体に被熱。
77	001－02	柱材	マツ	B 1	SD 1 黒色粘質		23.0 φ13.6	丸太	一部残	両端に加工痕。
78	019－01	柱材	ヒノキ	C 1	SD 1 黒色粘質		200.0 10.2 (抉り：巾14.5と12.4cm)	丸太	一部残	全体に被熱。面取加工有り。
79	019－02	柱材	ヒノキ	C 1	SD 1 黒色粘質	5	201.6 9.5 (挿入部5.0 3.0)	丸太	一部残	全体に被熱。面取加工有り。
80	019－03	板材	スギ	D 1	SD 1 黒色粘質	6	54.7 10.5 2.5 (小孔 φ1.1)	柾目	一部残	
80	020－01	板材	ヒノキ	E 3	SD 1	2	152.8 26.0 2.8 (角孔2～3cm, 巾4cm)	板目	ほぼ完存	角孔5カ所有り。中央に細痕有り。

第3表　遺物観察表

番号	実測番号	器種	材質	グリッド	遺構・層位	取上番号	計測値 長・幅・厚(高) cm	木取り	残存度	特記事項
81	027－02	板材	マツ	C1, C2	SD1		118.0 25.0 6.2	柾目	一部欠	両端角は残存良好。下半部は大きく欠落。
82	005－02	建材(柱)	ヒノキ	B1	SD1 黒色粘質	2	30.5 9.2 6.5 (挿入部4.3 4.4 2.4)	芯材	一部残	六角柱
83	026－01	建材	マツ	D2	SD1 黒色粘質		101.8 14.65 9.0 (角孔3.3 4.3 3.7)	芯材	一部残	全面被熱有り。
84	034－01	加工板状製品	ヒノキ	C2	SD1 黒色粘質	6	25.8 6.3 (柄2.6 1.6)	柾目	完存	
85	030－03	加工木片	ヒノキ	C2	SD1 黒色粘質		12.6 8.3 3.9	割材	一部欠	未製品剥車か。
86	006－02	加工材	マツ	C1	SD1		19.0 12.8 3.1	板目	一部残	左上部は軸又は把手。
87	013－02	棒状加工材	シキミ	C1	SD1	2	48.5 φ3.4	芯材	部分残	樹皮残存。
88	009－01	柱材(角)	マツ	C2	SD1 黒色粘質	4	18.75 8.1 5.15	芯材	一部残	先端部削痕有り。
89	015－02	柱材	クリ	B2	SD1 黒色粘質	5	45.8 φ11.5	半截	一部残	
90	016－01	柱材	クリ	B2	SD1 黒色粘質	4	24.3 9.5	割材	一部残	部分的に被熱。
91	023－02	柱材	クスノキ	B2	P7柱痕		47.3 φ9.7	丸太	部分残	下端に調整痕有り。
92	023－03	柱材	マツ	A3	P6杭		61.0 9.8	丸太	ほぼ完存	両端にチョウナ痕有り。
93	023－04	柱材	マツ	B2	P3		98.0 13.3	丸太	部分残	下端に加工痕。樹皮残存。
94	026－02	柱材	ヒノキ	D2	SD1	3	70.6 9.7 9.0	丸太	半分残	先端に加工有り。
95	026－03	柱材	ヒノキ	A1	P5		31.8 φ13.8～14.2	丸太	一部残	下端に加工痕。
96	026－04	柱材	ヒノキ	A1	P10		26.85 φ12.5～12.85	丸太	一部残	下端に加工痕。
97	028－01	柱材	クスノキ	B2	P3柱痕		83.1 φ11.2	芯材	部分残	先端に調整痕。
98	033－02	柱材	マツ	B1	SD1 黒色粘質		54.7 10.3 7.8	芯材	部分残	部分的に被熱。先端に面取り。
99	006－01	板材	スギ	C1	SD1		35.3 7.0 1.5	板目	一部残	
100	024－01	板材	マツ	E2	SD1 黒色粘質	3	161.6 16.0 4.5	板目	部分残	
101	024－02	板材	マツ	B2	SD1 黒色粘質	2	115.3 11.0 2.8	板目	部分残	
102	025－01	板材	マツ	E1	SD1 黒色粘質	2	136.2 24.55 6.5	柾目	部分残	割材か
103	025－02	板材	マツ	B2	SD1 黒色粘質	3	146.7 18.0 3.0	板目	部分残	
104	025－03	板材	マツ	E3	SD1 黒色粘質	3	132.3 11.9 2.7	板目	部分残	中央下側に巾10cmの抉り痕有り。
105	027－03	板材	ヒノキ	D1	SD1	3	114.5 10.7 4.5	板目	部分残	上面は残存良好。
106	028－02	板材	スギ	B1	SD1		104.6 18.2 4.6	板目	部分残	表裏面に調整痕有り。
107	010－04	角材	スギ	B2	SD1	1	77.9 6.1 3.4	板目	部分残	
108	013－03	角材	ヒノキ	B1	SD1	7	60.7 4.6 2.9	割材	部分残	棒状。先端に加工痕。
109	029－01	角材	スギ	E2	SD1 黒色粘質		19.8 5.8 2.8	柾目	一部残	
110	029－05	角材	ヒノキ	C2	SD1 黒色粘質		54.0 3.4 1.2	柾目	部分残	
111	030－02	角材	ヒノキ	C2	SD1 黒色粘質		17.0 4.8～5.8 4.0	割材	ほぼ完存	
112	031－01	角杭	マツ	C2	SD1		25.3 3.0 1.1	板目	部分残	先端に面取り加工。
113	031－02	角杭	ヒノキ	C2	SD1		18.0 3.0 2.2	柾目	部分残	
114	010－03	杭	カヤ	B1	SD1 黒色粘質	1	53.9 φ9.0	芯材	部分残	先端にハツリ痕有り。
115	010－01	杭？	マツ	B1	SD1 黒色粘質	2	31.9 φ10.0～10.2	丸太	部分残	下端に調整痕。
116	024－03	杭？	クリ	D1	SD1	5	150.1 φ9.6	芯材	部分残	柱材か
117	033－01	杭	カヤ	B1	SD1		51.5 φ7.1～8.1	芯材	一部残	先端にハツリ痕有り。

第4表　遺物観察表

第５章　本田氏館跡の遺構

１．地形・層序

（１）地形

今回の調査区は、既述のとおり岡田向遺跡から比高差30～40ｍの丘陵の西側先端部の尾根筋に位置する。標高は234ｍで、城館の東北半部にあたる。

丘陵一体は山林で、部分的にマツ等針葉樹が植林されている。西側谷筋と東北部裾には竹林が広がっている。このうち東北部裾の山側斜面には土坑が掘られているのが認められる。この尾根は、表土下は岩盤でしかも分厚く堆積しているものと考えられる。

竹林のある東から西側にかけての斜面は、急峻で斜度はおおよそ40°以上を示す。この地点を過ぎて、標高220ｍから頂上にかけての斜面はやや緩やかになり、頂部の平坦部にたどりつく。

一方、頂部を過ぎて南方側には、土堤で囲まれた平坦部が広がる。主郭部分（未調査）の可能性がある。ここには井戸残存している。さらにこの地点から西側には柏尾の現集落につながる生活道路が延びている。現集落の標高は、平均で210ｍと考えられる。

一方、東側から南側裾には、現在、作業用の通路（畦道）が細長く連続しており、さらに奥部には氏神が祀られている。

城館は、既述のように南から北にかけて連続する尾根上のほぼ先端部に構えられ、主要施設はこの狭隘な半径25ｍ程の範囲に配置されている。当時の登城路は、現在の通路（畦道）に削平され認められないがほぼ同様の箇所に重複していたものと考えられる。

（２）層序

表土は、茶褐色土（腐植土）が頂部においては分厚く堆積しているが、裾部においては枯木、枯枝のみで地山に達する箇所が殆どである。

標高220～230ｍ付近の基本的な層序は次の通りである。第１層は、腐植土で、第２層は黄暗褐色粘質土が堆積し、数カ所でこの第２層が改変された第３層、灰黄褐色粘質土が堆積している。

これに対して、南側の一部では、この第３層がさらに改変された第４層、粘性の強い灰黄褐色粘質土を検出した箇所もあった。曲輪や中世墓はおもに第２層下面で検出した。

２．遺構概要

標高234ｍ地点の平坦部に認められるのは、曲輪Ⅰである。この曲輪には南側から近現代の地道が取り付いている。

曲輪Ⅰの北側縁辺の落ち込んだ平坦部には曲輪Ⅱ、さらに下方の北側に降りた標高228ｍ付近に細長く続く平坦部が認められる。これは曲輪Ⅲである。

この地点から西側に通路を隔てて同じレベルに曲輪Ⅳが認められる。曲輪Ⅰの東側には通路がつづら折れで麓へ延びている。西側には南北方向に谷が認められるが、これは後世に取り付けられた地道である。

一方、東側法面では、中世墓や土坑を確認した。表土下で礫石が認められた中世墓や殆ど遺物の認められなかった土坑も検出した。順に記述し、後の表にまとめた。

ａ．曲輪Ⅰ

曲輪Ⅰは調査区の最高所にあたる、標高234ｍに位置する。土塁は築かれていない。長軸６ｍ、短軸は４ｍの平坦部である。立木伐採により、東側の眺望が伺える。表土は腐植土で分厚く覆われていた。除去後は、地山に至ったが、施設内に主な遺構は認められなかった。

なお、丘陵頂の表土下で古墳時代の須恵器を採集しているので、周辺遺構との関連性からかつては古墳が存在したとも推察される。

ｂ．曲輪Ⅱ

曲輪Ⅱは曲輪Ⅰの谷を挟んで東側丘陵斜面に位置する。標高は228ｍ前後である。一辺が６ｍほどのやや方形に近い平坦部で、そこから半円弧状の平坦部が両側に延びている。遺物は認められない。

ｃ．曲輪Ⅲ

曲輪Ⅱからはやや下った低位置に認められた。や

や傾斜した平坦部である。幅は３mで、延長20mほどを検出した。いわゆる帯曲輪である。

ｄ．曲輪Ⅳ

通路の途中にやや傾斜した平坦部が認められる。曲輪、である。上記の曲輪と比較すると最も小規模である。四方が４mほどの施設である。この曲輪と対岸の尾根を挟んだ平坦部の間には土堤が設けられている。これはおそらく後世の地道であるとみられる。

ｅ．中世墓

ＳＸ13　Ｈ10グリッドで確認した。縦2.4m×横1.5mの範囲に認められた。立石２個体と積石を検出した。総量は115個体であった。これらはおおよそ３段に重ねられており、上面で陶器片を確認した。室町時代後半のものと考えられる。

ＳＸ14　Ｄ８グリッドで検出した。上記ＳＸ13と比較すると小規模である。積石もややまばらである。陶器等時期決定につながる遺物は確認していないがその規模や積石が多数出土したことから同時期の遺構であると考えられる。

ｆ．土坑

検出時には横穴と捉えていた遺構である。丘陵裾部分集中し、11箇所を確認した。どれもやや斜め上から掘削されていて、不整形なものが多い。順に記述する。

ＳＫ１　Ｂ区で、上層の集石を除去した後の下面で検出した。平面形はやや四角形気味の遺構である。両辺ともにほぼ１mで、深さは0.5mである。底から室町時代後期の土師器皿が出土した。

ＳＫ２　削平を受け、残存状況が悪く、平面形は不整形である。長軸は２mで、深さは0．２mと非常に浅い。炭化物が見られた。

ＳＫ３　丘陵東裾で検出した遺構である。検出当初は覆土がよく締まり、不明瞭な楕円形であった。完掘後はいわゆる隅丸方形になった。流土の進入も激しく確定に困難を極めた。上面の集石除去後に確認できた遺構である。縦1.2m、横0.7mで深さは山側で0.4mである。底部で獣骨片が出土した。

ＳＫ４　ＳＫ２の南方で確認した。不整形で縦1.6m、横1.2m、深さ0.2mである。出土遺物が土師器細片であるため詳細時期は不明である。

ＳＫ５　ＳＫ４の南隣りで検出した。規模的にはＳＫ４を一回り小さくした規模の遺構である。直径1.2m、深さは0.3mである。上記同様、時期を特定できる遺物は出土していない。

ＳＫ６　ＳＫ５のすぐ西方上で確認した。平面形は楕円で断面形は袋状である。直径1.2mである。当初横穴墓としたが、遺物が認められず、炭化物等も検出していないので、単に土坑とした。

ＳＫ７　ＳＫ２のすぐ下で確認した。直径0.8mと比較的小規模な遺構である。深さは0.7mと他よりやや深く、底部からの立ち上がりがややオーバーハング気味である。細片は出土しているが詳細な時期は不明である。

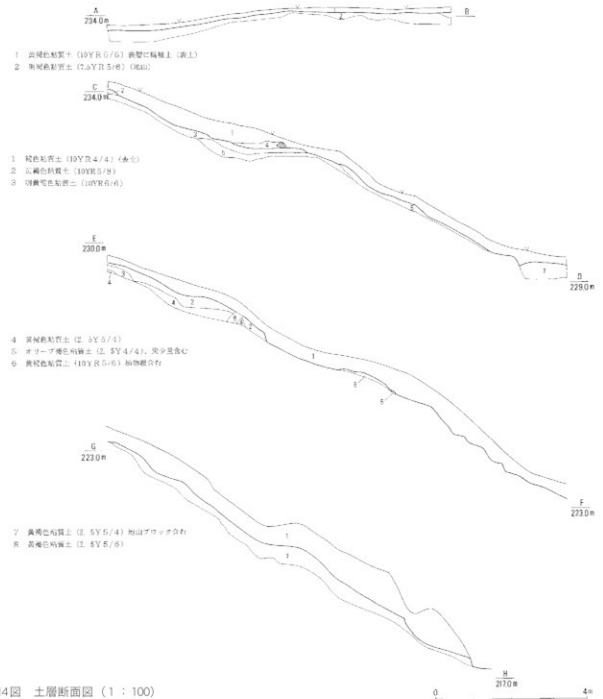
ＳＫ８　東側裾の通路脇で検出した遺構である。山側ほど先端がすぼまり、底部検出が非常に困難であった。推定で直径が１m、深さは0.6mである。

ＳＫ９　ＳＫ２の北方下で確認した。表土除去直後は、地山と埋土色に差が無く見極めがつかなかったが、結果的に浅い窪みとなった。形状は不整形で、直径１m、深さは0.2mである。

ＳＫ10　ＳＫ９の隣、Ｅ11グリッドで確認した。不整形で、直径が0.6m、深さ0.3mである。詳細時期は不明。

ＳＫ11　Ｄ９グリッドで検出した。検出当初は、後世の土取り跡と考えたが、周囲の土坑の規模や埋土の状況から最終的に土坑とした。直径2.4m、深さ1.4m以上である。開口部は縦長で後部と先端との高低差が40°と険しい。

第13図　本田氏館跡地区割図

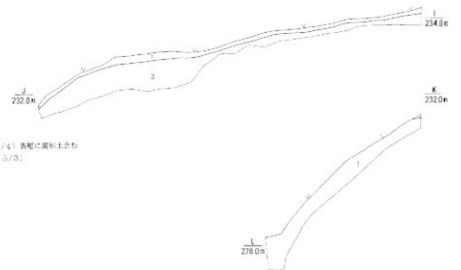


第14図　土層断面図（1：100）

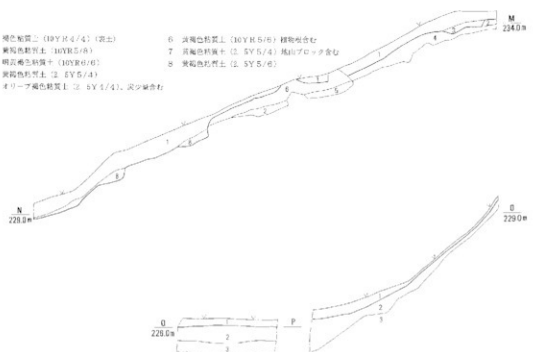
遺構番号	検出時	性格	時期	地区	遺構面	グリッド	特徴・形状・計測数値など	備考
ＳＫ１	ＳＫ１	土坑	室町	B	2	Ｈ９・10	不整方形 1.0m×1.0m	土師器皿
ＳＫ２	ＳＫ２	土坑	室町	F	2	Ｆ11	不整形 2.0m 0.2m	
ＳＫ３	ＳＫ３	土坑	室町	F	2	Ｄ８	不整楕円 0.6m×0.6m 0.4m	上層にＳＸ14、骨片
ＳＫ４	ＳＫ４	土坑	室町	F	2	Ｆ11・12	不整形 1.6m 0.2m	
ＳＫ５	ＳＫ５	土坑	室町	F	2	Ｇ11・12	不整形 1.2m 0.3m	
ＳＫ６	横穴１	土坑	室町	F	2	Ｇ11	楕円形、袋状 1.2m 0.5m	
ＳＫ７	横穴２	土坑	室町	F	2	Ｆ11	不整形 0.8m 0.7m	
ＳＫ８	横穴３	土坑	室町	F	2	Ｅ12	不整形 1.0m 0.6m	
ＳＫ９	横穴４	土坑	室町	F	2	Ｅ11	不整形 1.0m 0.2m	
ＳＫ10	横穴５	土坑	室町	F	2	Ｅ11	不整形 0.6m 0.3m	
ＳＫ11	横穴８	土坑	室町	F	2	Ｄ９	不整形 2.4m 1.4m	
ＳＸ13	集石１	中世墓	中世	B	1	Ｈ10	不整方形,三段積立石２個体有	土師器、瓦器
ＳＸ14	集石２	中世墓	中世	F	1	Ｄ８	不整方形,一段積	

第５表　本田氏館跡遺構一覧表

＊遺構番号12は欠番



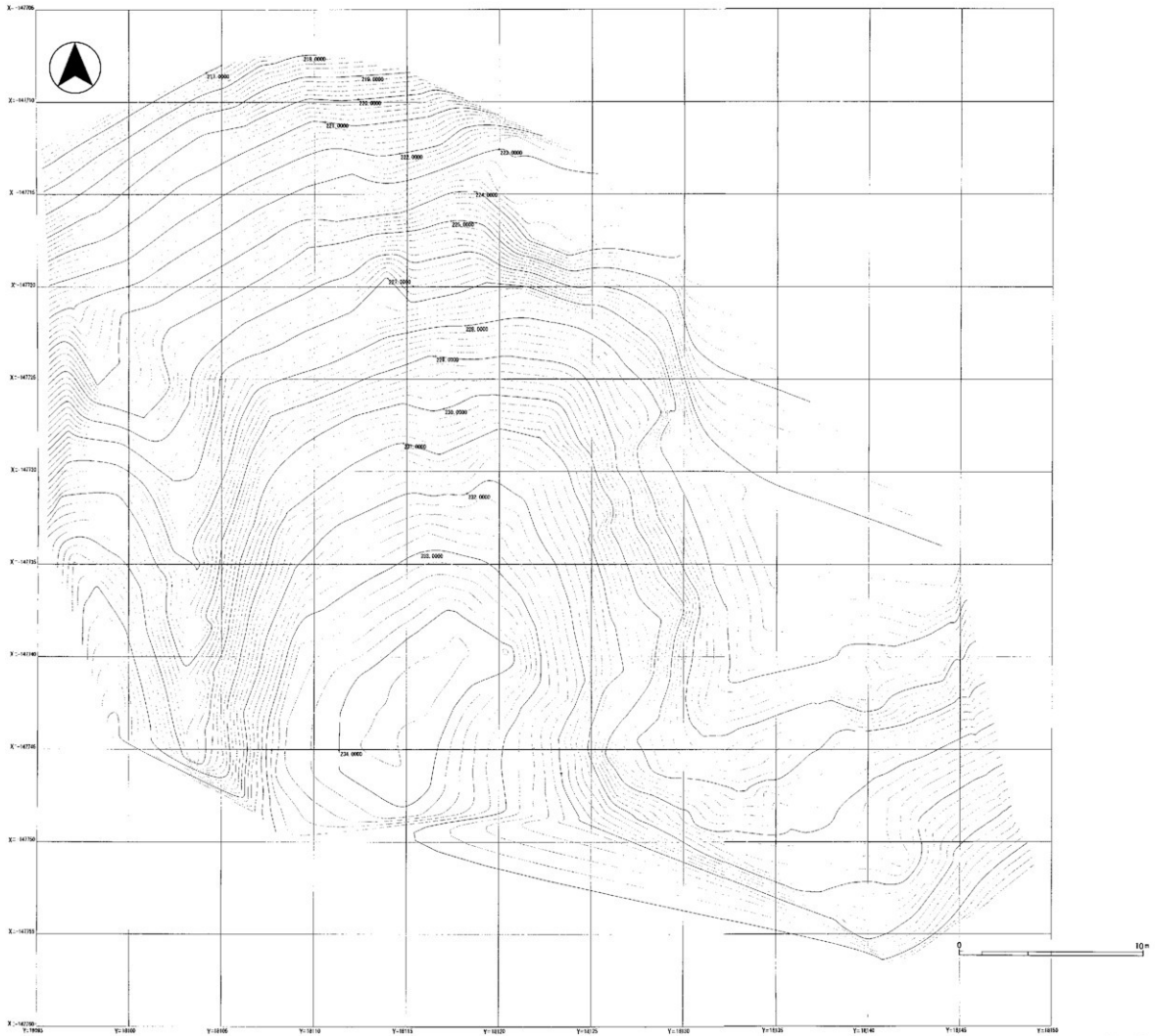
1　褐色粘質土（10YR4/4）表土
2　黄褐色粘質土（2．5Y5/3）



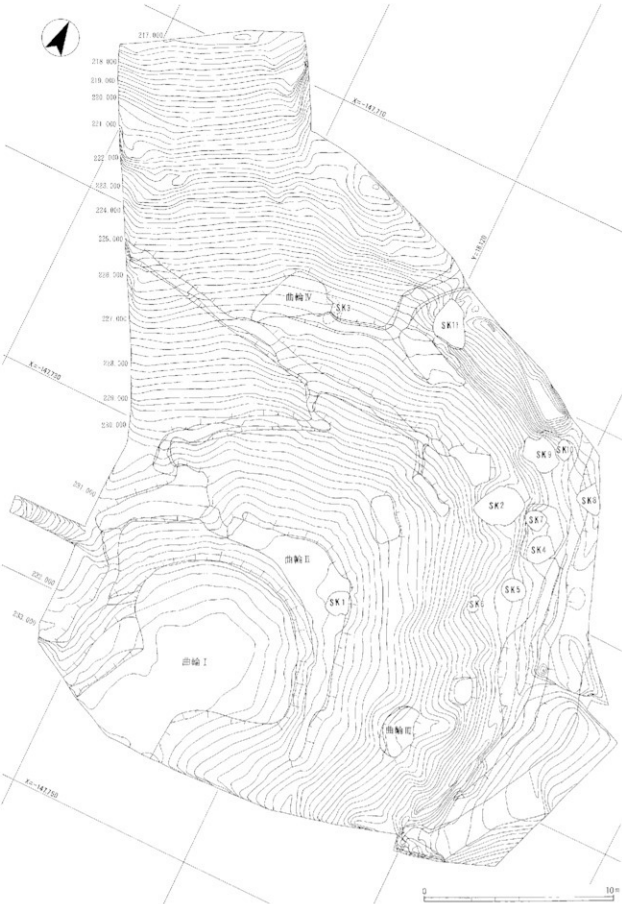
1　褐色粘質土（10YR4/4）（表土）
2　黄褐色粘質土（10YR5/8）
3　明黄褐色粘質土（10YR6/6）
4　黄褐色粘質土（2．5Y5/4）
5　オリーブ褐色粘質土（2．5Y4/4）、炭少量含む
6　黄褐色粘質土（10YR5/6）植物根含む
7　黄褐色粘質土（2．5Y5/4）地山ブロック含む
8　黄褐色粘質土（2．5Y5/6）

1　こぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）（表土）
2　褐色粘質土（10YR4/6）（第2層）
3　明黄褐色粘質土（10YR6/8）マンガン含む粗砂（30cm）

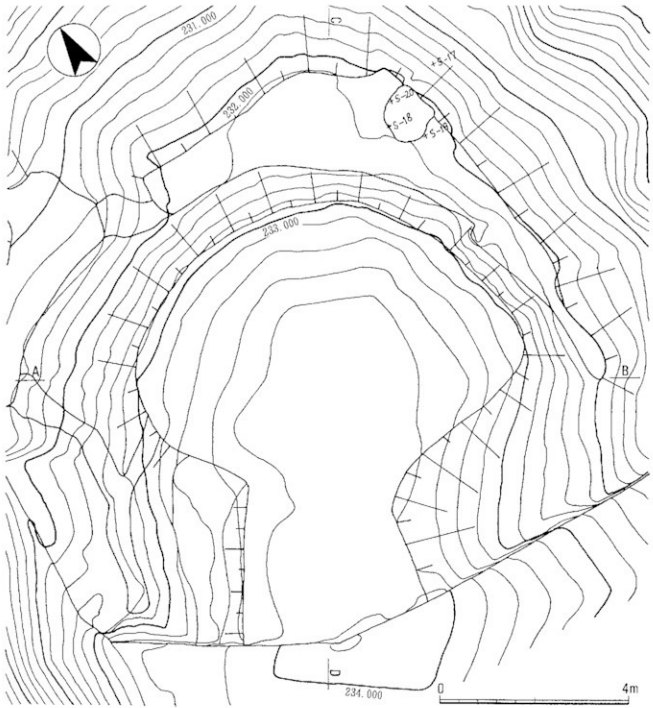
第15図　土層断面図（1：100）



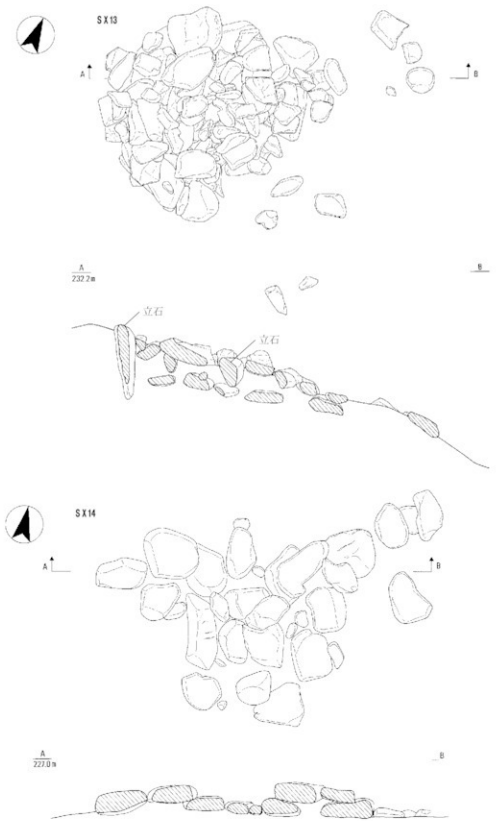
第16図　本田氏館跡　調査前測量図（1：200）



第17図　本田氏館跡測量図（1：200）

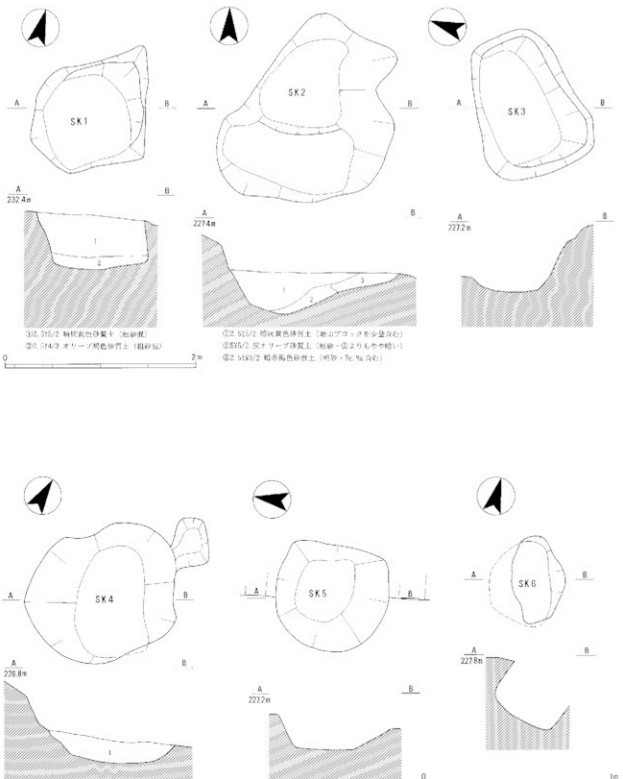


第18図　曲輪Ⅰ平面図・断面図（1：100）

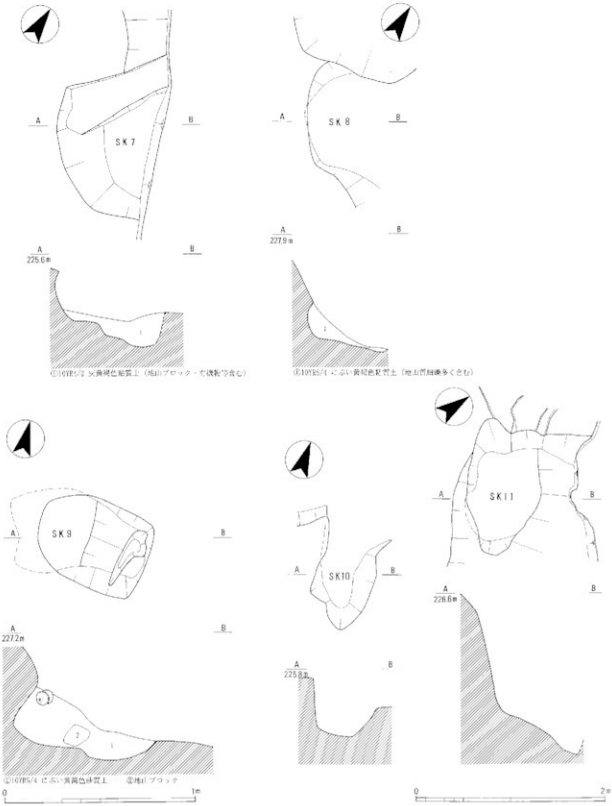


第19図　S X 13・14実測図（1：20）

0　1m



第20図　ＳＫ１・２・３・４・５・６実測図（ＳＫ１のみ１：40、他は１：20）



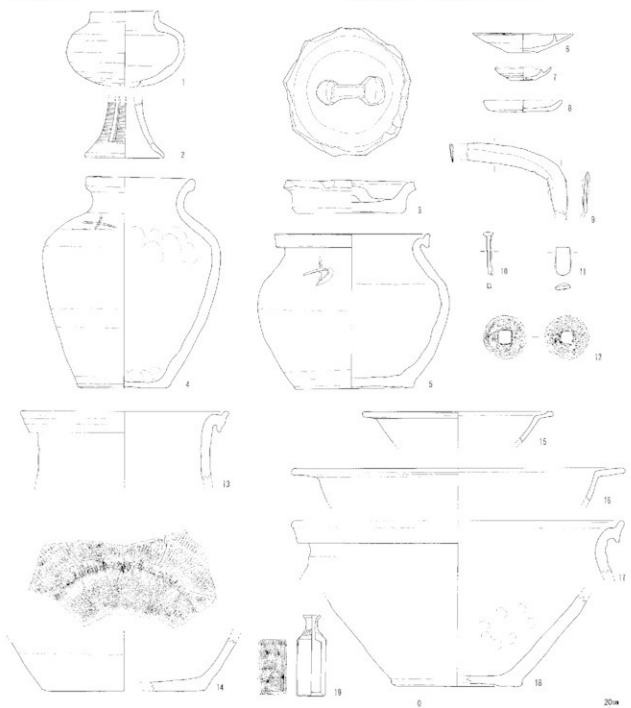
第21図　ＳＫ7・8・9・10・11実測図（ＳＫ11のみ１：40、他は１：20）

第６章　本田氏館跡の出土遺物

出土した遺物は、岡田向遺跡に比較すると城跡であるためか、少量であった。コンテナパットで８箱である。中世の陶器類が中心で、石塔も含まれていた。順に記述する。また、表土除去の際には、周辺に分布する古墳群関係遺物も認められたので、これらも列記した。

１．古墳時代の出土遺物

１は須恵器無頸壺である。底部外面はヘラケズリが施され、不調製である。２は須恵器高杯の脚部である。外面には、横方向のカキメが施される。透かしは三方に開けられている。ともに脚部が長くなる古墳時代中葉ころの遺物とみられる。



第22図　出土遺物実測図（7）（1：4）（12のみ1：2）

2．中世の出土遺物

3～5は蔵骨器である。3は常滑焼蓋である。4の口縁はやや外反気味に立ち上がり、端部は丸みを帯びて、面をもつ。外面肩部に「十」の字のヘラ記号が認められる。5は4に比較し、降る遺物である。肩から底部が比較的短い器種である。口縁は外反し、端部は垂下して、外方からの強いナデによって面が作られている。

6・7は灯明皿である。7ほど小型で、口径は6㎝である。煤が付着している。ともに近世遺物であろう。

8は土師器皿で、底部は指オサエが明瞭である。

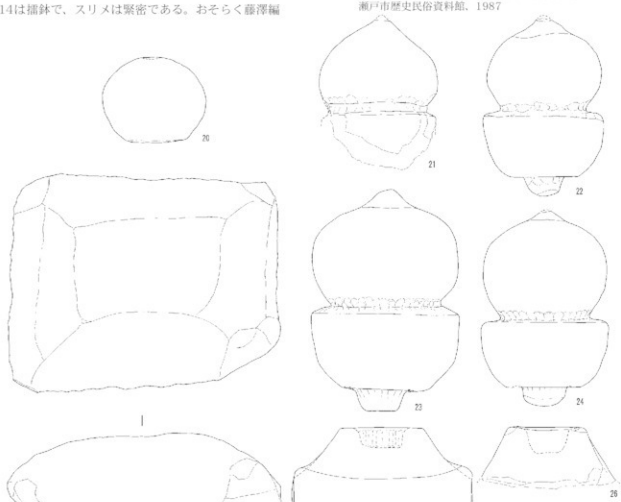
9～12は金属器である。9は鎌、10は釘、11は楔である。12は角孔が開けられた古銭で、劣化のためか文字は判読できない。

13～18は容器で、室町時代末ころの遺物である。13は常滑焼の大甕で、頸部から上の残存である。14は擂鉢で、スリメは緊密である。おそらく藤澤編年のⅥ期の後半に相当するものであろう[3]。15は鍋である。口縁は、屈曲し水平に引き出され、端部はヨコナデによってやや膨らむ。16の端部は膨らみを持たず、自然に丸められている。17は13と同時期の遺物である。

18は捏鉢である。19は瓶である。側面に太神宮と刻まれている。神棚に供したものであろうか。

20～27は石塔の各部品で、20～25は五輪塔である。20は宝珠で、先端が欠落している。21～24は空風輪で21を除いて他はほぼ完存品である。石材は花崗岩である。25と26は地輪である。27は笠石である。戦国～近世初頭ころであろうか。詳細時期は不明である。

【註】
(1) 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会、1978
(2) 赤羽一郎・中野晴久「中世常滑焼きを追って」シンポジウム資料、1994
(3) 藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館、1987



第23図　出土遺物実測図（8）（1：4）

番号	実測番号	器種	器形	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土(材質)	色調	残存度	特記事項
1	103	須恵器	短頸壺	ⅡB3	第Ⅱ層	(口)7.2 (体部径) 12.5	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	口縁1/12	
2	104	須恵器	高杯	I 8	表土	(底)8.5	外：ロクロナデ→カキメ 内：ロクロナデ	密	灰色N6/0	口縁2/12	透かし三方向
3	202	陶器	蓋	J 12	第Ⅱ層	(底)11.2	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ→鉄釉	密	釉)黒色7.5YR3/2 素地)にぶい橙色5YR7/4	完存	伊賀焼
4	502	陶器	甕	F 11	表土	(口)11.6 (高)22.3 (底)10.0	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ	やや粗	にぶい褐色7.5YR5/3 にぶい橙色7.5YR6/4	口縁3/12	常滑焼、ヘラ記号あり
5	501	陶器	甕	E 11	SK2	(口)16.3 (高)16.4 (底)12.5	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ	やや粗	灰褐色5YR4/2 灰白色N7/0	完存	常滑焼、ヘラ記号あり
6	303	陶器	灯明皿	E 11	表土	(口)10.5 (高)2.0 (底)3.0	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ→施釉	密	釉)淡黄色2.5Y8/3 素地)灰白色2.5Y8/2	口縁1/12	未使用か
7	304	陶器	灯明皿	J 8	表土	(口)16.0 (高)1.4 (底)2.6	外：ロクロナデ→ロクロケズリ 内：ロクロナデ→施釉	密	釉)灰白色2.5Y8/1 素地)浅黄色2.5Y7/3	口縁3/12	未使用か
8	305	土師器	小皿	H10	BE SX14下層	(口)8.2 (高)1.3	外：ヨコナデ→ナデ→指オサエ 内：横ナデ→ナデ	密	橙色7.5YR6/6	口縁6/12	
9	1102	金属品	鎌	J 12	第Ⅱ層	(横)10.6 (縦)7.4 (厚)0.3	刃幅2cm	鉄	―――	先端部欠損	
10	1105	金属品	釘	F 1	包含層	(長)4.7 (重)7	断面：角型	鉄	―――	下端部折損	
11	1103	金属品	楔	J 12	第Ⅱ層	(横)1.0 (縦)3.0 (厚)0.3	下端部：平棒円形に仕上げ	鉄	―――	完存	
12	1104	銭貨	寛永通宝	J 9	表土	(重)6	表面：記銘	銅	―――	完存	
13	401	陶器	甕	E 8	SK3	(口)22.1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや密	灰白色N7/0 褐灰色5YR4/1	口縁1/12	
14	201	陶器	擂鉢	F 11	表土	(底)17.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ→クシメ	密	釉)黒色7.5YR2/1 素地)灰黄褐色10YR6/2	底部残片	伊賀焼
15	301	陶器	鉢	I 12	包	(口)20.0	外：ロクロナデ→灰釉 内：ロクロナデ	密	釉)灰白色5Y7/1 断面)灰白色5Y7/1	口縁1/12	灰釉僅か
16	102	土師器	焙烙	F 11	表土	(口)35.0	外：ヨコナデ→工具ナデ→施釉 内：ヨコナデ→ナデ→施釉	密	灰黄褐色10YR6/2 灰黄褐色10YR5/2	口縁2/12	うすい施釉
17	101	陶器	甕	E 11	表土	(口)35.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	密	灰色N4/0 褐色7.5YR4/3	口縁1/12	自然釉が口縁内面にかかる
18	402	陶器	甕	E 8	SK3	(底)13.6	外：ロクロナデ→ナデ 内：ロクロナデ	やや粗	褐灰色10YR5/1	底部3/12	
19	302	陶器	瓶	E 11	表土	(口)1.8 (高)8.5 (幅)3.0	ナデ	密	にぶい赤褐色5YR4/4 赤褐色5YR4/6	完存	
20	902	石造物	空輪	F 11	表土	(径)11.0 (高)9.1 (重)2.1	下部は平らなケズリ	花崗岩	―――	上端部欠損	
21	702	石造物	空風輪	F 11	表土	(径)12.2 (高)15.8 (重)2.85	―――	花崗岩	―――	風輪下部欠落	
22	701	石造物	空風輪	F 11	表土	(径)12.0 (高)16.8 (重)3.4	突入部高：2cm	花崗岩	―――	上端部欠損	
23	1001	石造物	空風輪	E 11	SK7埋土	(径)15.2 (高)21 (重)7.4	突入部：深さ2.2cm	花崗岩	―――	完存	
24	1002	石造物	空風輪	E 11	表土	(径)15.2 (高)18.7 (重)4.6	突入部：深さ1.9cm	花崗岩	―――	上端部欠損	
25	901	石造物	火輪	F 11	表土	(径)18.8 (下)18.7 (高)9.3 (重)5.5	受入部：深さ2.2cm	花崗岩	―――	一部欠損	
26	801	石造物	火輪	F 11	表土	(口)7.5 (高)6.5 (重)1.5	受入部：深さ2.5cm	花崗岩	―――	上半部のみ	
27	601	石造物	地輪	F 11	表土	(横)28.9 (縦)23.1 (高)8.9	―――	花崗岩	―――	右角部欠落	

第6表　遺物観察表

第7章　結　　語

1．岡田向遺跡・古墳群の所在について

岡田向遺跡は、農道建設に先立つもので、全体面積に制約を受けるかたちとなった。幅の狭い調査区となったが、東方奥の丘陵からの谷地形から延びる箇所にＳＤ１を検出した。出土遺物は古墳時代の須恵器や木製品に注目に値するものがみられた。このＳＤ１を検出した地点は、先述のとおり、溝が集落方向、つまり南方へ向かう分岐点にあたると考えられ、このため遺物が集中したものと考えられる。

一方、岡田向古墳をはじめ周辺には北の権現古墳やさらに柏尾地区には１次調査時に岡田向古墳が発見されているため、同時期にこの地域一帯に築造された古墳群がさらに多数存在したことが考えられる。

さて、岡田向古墳群の１号墳については主体部が一部攪乱されてはいたが、この調査によって大きな発見となった。ここでは石室が１基検出され、須恵器杯身・杯蓋等古墳後期を代表する遺物が確認された。

今回はこの地点に近接する調査区であることからこれに関係する遺物の流入もしくは古墳時代の集落との関連性も考えられる。まだこのほかにも複数基の古墳の存在も類推できる。

2．岡田向遺跡出土木製品「槌」について

ＳＤ１出土遺物の中には、多種多様な製品が出土している。柱材から日用雑器に至るまで規格も大小様々ある中で、類例の少ない槌（No70・71）が注目できる遺物である。今回の遺物は運搬具のなかでも大きく、本県では、高賀遺跡に同形状の遺物が報告されている。近隣では大阪府の鬼虎川遺跡や他に滋賀県や静岡県に２～３類例が知られているだけで、本県では２例目となる。例えば、鬼虎川遺跡出土の槌を例にとると、滑走部は「滑り板」とこれに垂直に「隆起部」が構成されている。しかし、本品の場合は一枚板を垂直に立て、側面に木口を作り出している。さらに先端部を接地面から上方向に緩くカーブさせて削っている。これらの規格は、岡田向遺跡の製品と比較して小さめで重量が比較的あるものの運搬には適さないことが考えられる。農耕具発祥説はひとまず置くことにして部材の厚みや材質から考えた場合、今回の出土品は木材やあるいは石材などの重量感のあるもの、又はある程度長い物資の運搬に使用したと考えられる。

3．岡田向遺跡出土木製品の樹種と用途について

自然科学分析の結果を受けて、対象試料の77点について、樹種とその使用方法についての相関関係を考察した。まず、最も多く使用された樹種はヒノキで、32点を数えた。これは、軟質材であり、加工の容易な点に起因していると考えられる。用途別には建材から曲物、下駄に至るまで幅広い。次に使用頻度が高かったのはマツであった。これは板材や柱として使用されていた。やはりこれも建築材料として使われている。第３には、11点でスギであった。これは梯子や杓・角材に加工されて使われていた。

材質的には硬質材であり、劣化の進度か比較的遅いものである。その次にはブナである。これは柱材や杭への利用が多い。又鍬等農具としても使用されている。クスノキをモクレン、シキミ等は１点のみの利用であった。

4．本田氏城築城以前の遺構について

古墳時代後期の遺跡を周辺に求めると、小波田古墳等が該当する。旧上野市内にも周知の遺跡が存在する。これらは畿内勢力の拡大のなかで、在地勢力拡大による群集墳が各地で見られるようになる。この青山では、地形的には狭隘な丘陵尾根の先端部に集中していることがわかる。これらは規模的には直径が10ｍまでのものが多数を占める。おそらく本田氏城が築城される以前に、相当数の小規模古墳が造営されていたと考えられる。この南東部背後には標高の高い場所には北の権現古墳群が築造されている。これらの墳丘も規模的には小さいもので、５～６ｍ程度の円墳である。

5．本田氏城のＳＸ13・14について

主郭から東へ降った地点及び北側斜面の中腹にて確認した遺構群である。１も２も調査の工程に応じて、任意に上段、中段、下段という石材の積み上げ方があると判断し、随時作図しながら取り上げていったわけである。ＳＸ13には、最奥に50㎝もの長大な花崗岩質の立石を含む115点が認められた。

これらは直径1.2～1.3ｍの楕円状の範囲に石材が積み上げられていた。各段の石材は花崗岩が大半であった。大きさは平均すると縦20㎝、横15㎝、重量3.5kgの人頭をひとまわり小さくした石材であった。（第７～８表）共伴する遺物が陶器片以外に認められなかったので詳細な時期は判別できないがおおよそ室町後期ころに造られたとみられる。

今回の立石を墓標にする例、五輪塔を墓石にする例は時期差はあると考えられ、五輪塔が確認されたＳＫ１からは共伴して信楽焼の甕の破片も出土した[注7]。これは大窯編年では15世紀中葉ころに相当するものであり、若干古い性格の遺構である。

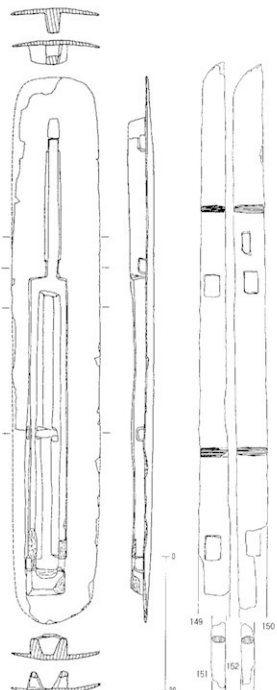
６．本田氏館跡出土の五輪塔について

本田氏館跡の調査では、地元岡田・柏尾地区には現在は中世に遡る墓所などは伝わっていない。しかし、調査区周辺を分布調査すると各所で五輪塔を確認できる。

現在の墓所は、岡田向遺跡の東側背後、丘陵上にある小鴨氏城の裾を造成し、設けられている。この境内には、近世の六地蔵とおよそ200基の近世、近代の墓石が並ぶが、この中に、五輪塔が数体点在している状況である。中央には宝篋印塔が安置されている。これは近世以降のものであると考えられる[注8]。

ところで今回ＳＫ２等から発見された遺物は、各部位のうち水輪を除いた空風輪・火輪・地輪であったが、基礎部分に当たる地輪は低く、これは一般的には古い段階の型式であるとも言われている[注9]。また、このほかに笠石が１点ある。これはこれ以前の遺物であると考えられる。これらの遺物から墓所が築かれたのは、中世でも前半期あるいは、前期初頭ころまで遡ると考えられる。上述の墓所に見られる五輪塔は、本田氏城出土遺物よりも若干後に造立されたことになる[注10・11・12]。

したがって、今回の調査区から出土した骨蔵器の編年から推定すると、墓所として存続した時期は14世紀の後半から15世紀初頭とみられる。



第24図　蟹の使用例

【註】
1　前掲　青山町遺跡調査会『岡田向遺跡発掘調査報告書』
2　前掲註　高賀遺跡出土の運搬具
3　『木器集成図録』－近畿原始編－奈良国立文化財研究所1992
4　芋本隆裕「第５章　考察」『鬼虎川の木質遺物』－第７次発掘調査報告書　第４冊－　（財）東大阪市文化財協会、1987
5　樋上　昇「曲柄鍬の伝播と流通」『考古学ジャーナル』No486　2002
6　田岡香逸「､日本各地の仏塔」『新版　仏教考古学講座』第三巻塔・塔婆
7　同掲註
8　金光善観墓相研究所編『お墓の歴史』2005
9　村木二郎『仏教考古学講座』第３巻岩波書店、1992
10　村木二郎他「大和における中・近世墓地の調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第111集、2004
11　森川櫻男『安田中世墓発掘調査報告』青山町教育委員会、1988
12　斎藤　忠『墓と仏教』『仏教民俗学大系』４祖先祭祀と葬墓、名著出版　1988

取上げ番号	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	備　　考
1	14	10	3	0.4	
2	46	20	12	14.2	立石
3	17	11	10	2.0	
4	17	14	6	2.2	加工痕有り
5	16	10	6	1.5	
6	19	15	6	2.1	
7	15	11	7	1.6	
8	16	12	8	2.2	
9	29	21	8	6.2	
10	19	12	5	1.5	
11	28	22	20	17.5	
12	14	10	4	0.8	
13	17	11	8	1.7	
14	42	22	15	34.9	
15	24	20	6	4.3	
16	17	8	6	1.1	
17	16	10	5	1.2	
18	22	14	11	4.0	
19	12	10	5	0.7	
20	17	11	5	1.3	
21	15	10	5	1.0	
22	20	8	8	1.7	
23	21	13	6	3.0	
24	15	13	5	1.6	
25	18	18	5	3.4	
26	17	12	5	0.8	
27	14	12	4	1.2	
28	23	14	7	2.7	加工痕有り
29	14	11	5	1.0	
30	13	12	5	1.5	
31	18	11	7	1.9	
32	28	21	7	6.0	
33	13	10	6	0.8	
34	9	8	4	0.2	
35	12	8	3	0.5	
36	14	10	6	1.7	
37	15	14	5	1.6	
38	23	15	6	2.4	
39	18	9	5	1.2	
40	13	8	5	0.9	
41	18	11	7	1.8	
42	24	14	10	4.3	
43	18	11	5	2.0	
44	18	16	7	3.1	立石
45	13	10	5	1.4	
46	16	14	6	2.3	
47	17	10	4	1.2	
48	7	6	2	1.0	
49	20	12	4	2.0	
50	42	21	17	20.8	
51	19	18	7	3.2	
52	17	13	7	1.2	
53	11	8	2	0.3	
54	24	17	7	4.2	
55	19	5	3	0.6	
56	33	24	15	16.0	
57	24	17	5	3.2	
58	24	17	3	1.8	
59	18	12	6	1.5	

取上げ番号	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	備　　考
60	26	20	7	7.2	
61	35	21	10	9.4	
62	20	8	8	1.6	
63	27	17	11	5.0	
64	10	8	3	0.4	
65	20	17	6	3.0	
66	20	16	5	2.6	
67	12	10	5	0.8	
68	16	9	5	1.0	
69	19	14	5	1.6	
70	27	18	8	5.8	
71	14	12	5	1.0	
72	17	10	7	1.3	
73	17	14	5	1.5	
74	17	15	4	1.0	
75	20	10	6	1.0	
76	18	14	10	3.2	
77	21	19	13	8.4	
78	12	10	5	1.0	
79	21	11	3	1.0	
80	23	18	5	2.4	
81	19	16	12	3.3	
82	24	15	15	6.6	
83	14	8	5	0.8	
84	14	12	4	1.0	
85	16	12	6	1.8	
86	27	20	12	9.8	
87	19	12	8	2.6	
88	18	14	7	2.4	
89	14	11	6	0.9	
90	16	14	8	2.5	
91	12	10	4	0.8	
92	25	26	15	18.2	
93	18	11	6	1.6	
94	34	21	17	10.0	
95	15	9	6	1.2	
96	16	9	3	1.0	
97	16	11	6	2.6	
98	12	9	7	1.1	
99	15	7	7	1.4	
100	17	14	6	1.7	
101	18	11	5	1.2	
102	11	7	5	0.6	
103	14	9	6	1.0	
104	19	8	6	1.2	
105	17	12	10	3.8	
106	12	11	9	1.8	
107	26	18	14	9.8	
108	14	8	5	0.8	
109	12	7	6	0.7	
110	22	14	6	2.0	
111	25	15	13	6.4	
112	14	11	5	1.2	
113	16	13	5	1.8	
114	16	9	9	2.6	
115	21	11	3	1.3	

第７表　ＳＸ13石材計測表

取上げ番号	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	備　考
1	26	13	5	3.6	
2	25	16	8	5.2	
3	15	15	4	2.6	
4	25	20	7	8.4	
5	20	14	6	2.4	
6	29	26	8	8.8	
7	33	16	6	6.6	
8	28	20	8	11.4	
9	27	21	8	7.4	
10	29	22	9	12.5	
11	24	12	4	2.9	
12	26	20	7	5.9	
13	26	16	5	3.1	
14	23	14	5	3.6	
15	21	19	8	6.0	
16	35	23	8	14.0	
17	23	22	8	7.0	
18	15	9	3	0.8	
19	40	21	10	13.8	
20	30	24	9	11.0	
21	26	21	10	11.4	
22	23	18	4	3.8	
23	29	14	7	4.4	
24	18	18	6	4.8	
25	13	9	5	1.0	
26	8	6	3	0.1	
27	9	8	3	0.4	
28	9	8	4	0.4	
29	11	7	7	0.6	
30	10	7	3	0.4	
31	11	8	3	0.3	
32	22	11	7	1.9	
33	23	15	6	4.3	
34	21	18	5	3.8	
35	18	15	4	2.2	
36	28	21	5	7.0	
37	9	8	2	0.4	
38	10	6	3	0.4	
39	15	13	5	1.6	
40	9	6	3	0.2	
41	16	12	2	1.2	
42	27	22	7	6.4	
43	15	8	2	0.8	
44	20	14	4	2.8	
45	12	7	5	0.6	
46	9	6	3	0.4	
47	15	9	4	0.8	
48	12	9	3	0.6	
49	10	6	3	0.4	
50	12	8	4	0.6	
51	10	9	5	0.6	
52	12	11	2	0.6	
53	9	8	3	0.4	

第8表　ＳＸ14石材計測表

試料番号	樹種	点数	用途
5	ヒノキ科アスナロ属	32	曲物・農具・柱材他
3	マツ科モミ属	19	桁材・柱材・杭
4	スギ科スギ属スギ	11	下駄・梯子・部材
7	ブナ科クリ属クリ	3	柱材
1	イチイ科カヤ属カヤ	2	杭
6	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	2	又鍬
10	クスノキ科タブノキ属	2	柱材
2	マキ科マキ属イヌマキ	1	朝形
8	モクレン科モクレン属	1	曲柄
9	シキミ科シキミ属シキミ	1	桁材
11	ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ	1	綿打具
12	ツバキ科ツバキ属	1	竪杵
13	ツバキ科サカキ属サカキ	1	木錘

第９表　樹種別出土点数一覧

第８章　自然科学分析

（株）吉田生物研究所
汐見　真・白崎　泰子

１．試料

試料は三重県岡田向遺跡から出土した農具10点、服飾具２点、容器５点、雑具２点、建築部材38点、土木材５点、用途不明品15点の合計77点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹５種、広葉樹８種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）イチイ科カヤ属カヤ（Torreya　nutifera Sieb. et Zucc.）（遺物No.74,77）（写真No.74,77）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～４個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

２）マキ科マキ属イヌマキ（Podocarpus macropyllus Sweet）（遺物No.21）（写真No.21）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであり、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に１～２個ある。短冊型をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）をなして存在する。板目では放射組織は全て単列であった。イヌマキは本州（中・南部）、四国、九州、琉球に分布する。

３）マツ科モミ属（Abies sp.）

（遺物No.32～35,40,41,43,46,48,52,53,58,60～64,72,75）

（写真No.32～35,40,41,43,46,48,52,53,58,60～64,72,75）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射乳細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

４）スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）

（遺物No.1,2,4,6,20,31,38,59,66,67,69）

（写真No.1,2,4,6,20,31,38,59,66,67,69）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

５）ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis sp.）

（遺物No.3,7～19,22,28,29,30,36,37,39,42,44,45,54～56,65,68,70,71,73）

（写真No.3,7～19,22,28,29,30,36,37,39,42,44,45,54～56,65,68,70,71,73）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

６）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）

（遺物No.24,26）

（写真No.24,26）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200 μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に１～３細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平状細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁

孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

7）ブナ科クリ属クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc）

（遺物No.49,50,76）

（写真No.49,50,76）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

8）モクレン科モクレン属（Magnolia sp）

（遺物No.23）

（写真No.23）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110 μm）が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700 μmとなっている。モクレン属は、ホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

9）シキミ科シキミ属シキミ（Illicium religiosum Sieb. et Zucc）

（遺物No.47）

（写真No.47）

散孔材である。木口では小道管（～40 μm）が単独または2～4個が直線状、放射状に複合して分布する。年輪界の始めで道管が年輪にそって環孔状に配列している。柾目では道管は階段穿孔、側壁に階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～800 μmからなる。シキミは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

10）クスノキ科タブノキ属（Persea sp）

（遺物No.51,57）

（写真No.51,57）

散孔材である。木口では中庸で厚壁の道管（～130 μm）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、直立細胞からなり異性である。道管と放射組織間壁孔は円形、レンズ状、篩状の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～600 μmからなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞（樟脳油貯蔵細胞）となったものが見られる。タブノキ属はタブノキ、ホソバタブがあり、本州（日本海側は青森、太平洋側は岩手中部以南）、四国、九州、琉球に分布する。

11）ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ（Hydrangea paniculata Sieb）

（遺物No.25）

（写真No.25）

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～50 μm）が単独ないし複数個が接線状、塊状に複合して分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は階段状である。道管内には平板状のチロースがある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1.5mmからなる。直立細胞からなる単列翼部はきわめて長い。ノリウツギは北海道、本州、四国、九州に分布する。

12）ツバキ科ツバキ属（Camellia sp）

（遺物No.27）

（写真No.27）

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～40 μm）が単独ないし2～3個接合して均等に分布する。放射組織は1～3細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性

である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は１～４細胞列、高さ～１mm以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する

13）ツバキ科サカキ属サカキ（Cleyera japonica Thunberg. Pro parte emend. Sieb. et Zucc.）

（遺物No.5）

（写真No.5）

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～50 μm）が単独ないし２～４個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に対列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ～1.5 からなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州（茨城、石川以西南）、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

No	報告No	実測図番号	品名	樹種
1	42	007－01	下駄	スギ科スギ属スギ
2	43	012－01	下駄	スギ科スギ属スギ
3	44	005－01	木錘	ヒノキ科アスナロ属
4	45	022－01	木錘	スギ科スギ属スギ
5	46	002－02	木錘	ツバキ科サカキ属サカキ
6	47	022－02	杓形木製品	スギ科スギ属スギ
7	48	029－04	棒状具	ヒノキ科アスナロ属
8	49	031－03	棒状具	ヒノキ科アスナロ属
9	50	031－04	棒状具	ヒノキ科アスナロ属
10	51	021－01	有形棒状具	ヒノキ科アスナロ属
11	52	032－01	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
12	53	002－01	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
13	54	006－03	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属
14	55	001－01	桝付容器	ヒノキ科アスナロ属
15	56	004－01	箸（未製）	ヒノキ科アスナロ属
16	57	011－01	箸	ヒノキ科アスナロ属
17	58	009－02	刻形木製品	ヒノキ科アスナロ属
18	59	021－02	鍬形木製品	ヒノキ科アスナロ属
19	60	021－03	矢形木製品	ヒノキ科アスナロ属
20	61	029－02	小刀形木製品	スギ科スギ属スギ
21	62	029－03	刻形木製品	マキ科マキ属イヌマキ
22	63	035－01	楯	ヒノキ科アスナロ属
23	64	003－01	曲物側板芯要部	モクレン科モクレン属
24	65	008－01	曲物 又鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
25	66	014－01	エブリ状木製品	ユキノシタ科ジンチョウゲ属ノリウツギ
26	67	032－02	曲物側板	ブナ科コナラ属アカガシ亜属
27	68	005－03	堅杵	ツバキ科ツバキ属
28	69	030－01	大足	ヒノキ科アスナロ属
29	70	017－01	鍬	ヒノキ科アスナロ属
30	71	017－02	鍬	ヒノキ科アスナロ属
31	72	013－01	横子	スギ科スギ属スギ
32	73	010－02	桁材	マツ科モミ属
33	74	018－01	桁材	マツ科モミ属
34	75	023－01	桁材	マツ科モミ属
35	76	001－02	桁材	マツ科モミ属
36	77	019－01	桁材	ヒノキ科アスナロ属
37	78	019－02	桁材	ヒノキ科アスナロ属
38	79	015－03	桁材	スギ科スギ属スギ

第10表　岡田向遺跡出土木製品同定表

No	報告No	実測図番号	品名	樹種
39	80	020－01	板材	ヒノキ科アスナロ属
40	(未)	027－01	板材	マツ科モミ属
41	81	027－02	板材	マツ科モミ属
42	82	005－02	建材	ヒノキ科アスナロ属
43	83	026－01	建材	マツ科モミ属
44	84	034－01	加工板状製品	ヒノキ科アスナロ属
45	85	030－03	加工木片	ヒノキ科アスナロ属
46	86	006－02	加工材	マツ科モミ属
47	87	013－02	板材	シキミ科シキミ属シキミ
48	88	009－01	柱材(角)	マツ科モミ属
49	89	015－02	柱材	ブナ科クリ属クリ
50	90	016－01	柱材	ブナ科クリ属クリ
51	91	023－02	柱材	クスノキ科タブノキ属
52	92	023－03	柱材	マツ科モミ属
53	93	023－04	柱材	マツ科モミ属
54	94	026－02	柱材	ヒノキ科アスナロ属
55	95	026－03	柱材	ヒノキ科アスナロ属
56	96	026－04	柱材	ヒノキ科アスナロ属
57	97	028－01	柱材	クスノキ科タブノキ属
58	98	033－02	柱材	マツ科モミ属
59	99	006－01	板材	スギ科スギ属スギ
60	100	024－01	板材	マツ科モミ属
61	101	024－02	板材	マツ科モミ属
62	102	025－01	板材	マツ科モミ属
63	103	025－02	板材	マツ科モミ属
64	104	025－03	板材	マツ科モミ属
65	105	027－03	板材	ヒノキ科アスナロ属
66	106	028－02	板材	スギ科スギ属スギ
67	107	010－04	角材	スギ科スギ属スギ
68	108	013－03	角材	ヒノキ科アスナロ属
69	109	029－01	角材	スギ科スギ属スギ
70	110	029－05	角材	ヒノキ科アスナロ属
71	111	030－02	角材	ヒノキ科アスナロ属
72	112	031－01	角杭	マツ科モミ属
73	113	031－02	角杭	ヒノキ科アスナロ属
74	114	010－03	杭	イチイ科カヤ属カヤ
75	115	010－01	杭？	マツ科モミ属
76	116	024－03	杭	ブナ科クリ属クリ
77	117	033－01	杭	イチイ科カヤ属カヤ

写　真　図　版

図版1　岡田向遺跡遺構写真(1)

調査前風景（南から）

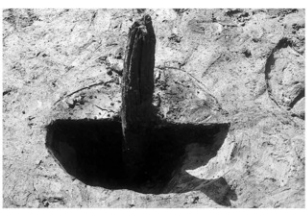
調査区全景（南から）

調査区西壁土層（東から）

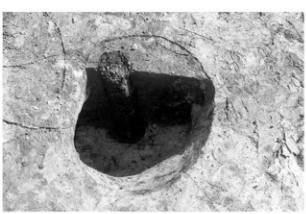
ＳＤ１（北から）

ＳＤ１北柱穴（南から）

ＳＤ１北柱穴（西から）


Ｂ２Pit ３検出状況（南から）

Ｂ３Pit １検出状況（東から）


Ｂ２Pit ７検出状況（西から）

Ａ２Pit ４検出状況（南から）

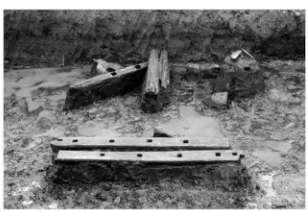
Ａ１Pit ９検出状況（西から）

Ａ１Pit10検出状況（東から）

ＳＤ１柱材出土状況（東から）

ＳＤ１木製品出土状況（東から）

ＳＤ１桶出土状況（南から）

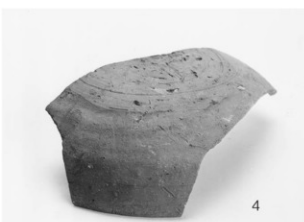


ＳＤ１橋出土状況（西から）

ＳＤ１橋出土状況（東から）

1

3


4

6

8

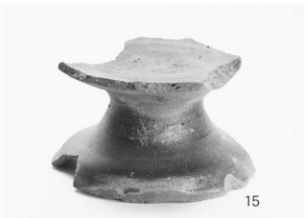
9

10

13

図版6　岡田向遺跡出土遺物(2)　SD-1出土土器

14


15

19

20

23

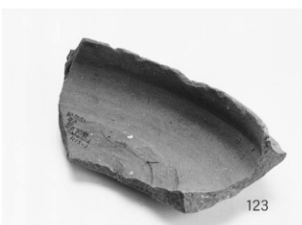
24

32

35

121

122


123

126

127

130

131

132

136

137　138　139　140

表
141

裏
141

150

151

153

160

167

44

45

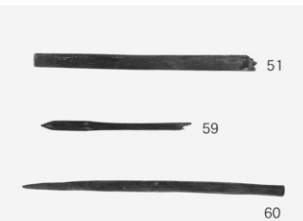
46

47

49

50

52


51

59

60

53

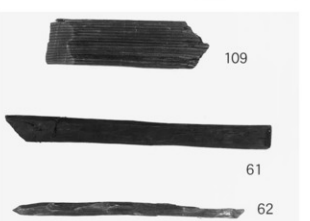
前面

側面

背面
55

上面
57

56


109
61
62

63

64

71

68

70

74

76

74

図版12　岡田向遺跡出土遺物(8)　SD1出土木製品

77

80

77

84

86

112 113

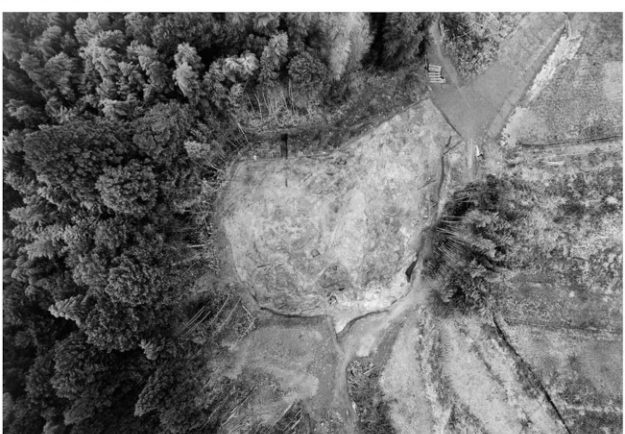
82

78

調査前風景（西から）

調査区西斜面（西から）

調査区全景（東から）



調査区全景（直上から）

東斜面掘削前（東から）

東斜面検出状況（東から）

ＳＸ13検出状況（東から）

積石取上後（東から）

ＳＸ13掘り下げ状況（東から）

腰曲輪検出状況（北から）

腰曲輪検出状況（南から）

ＳＫ２完掘状況（西から）

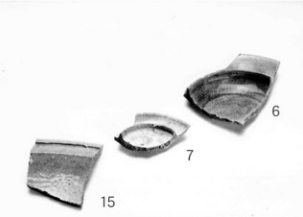
調査区東半（東から）

丘陵頂付近（西から）

西斜面近接（西から）

東斜面（西から）

1


6
7
15

3

4

5

8

10

11

9

12

13
18

17

14

19

20

21

22

23

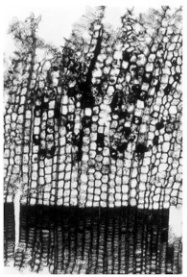
24

25

26

27

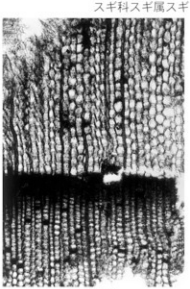
図版22　木製品組織写真(1)



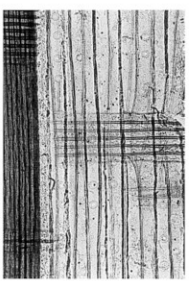
No－1　木口×40　スギ科スギ属スギ

柾目×100

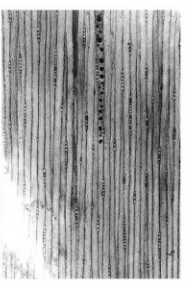
板目×40



No－2　木口×40　スギ科スギ属スギ



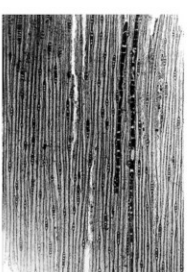
柾目×100



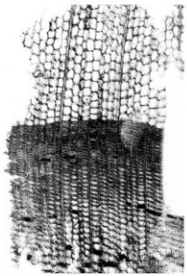
板目×40

No－3　木口×40　ヒノキ科アスナロ属

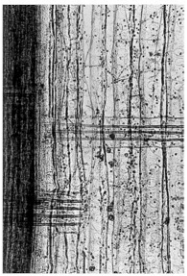
柾目×100



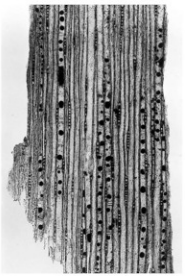
板目×40



No－4　　木口×10
スギ科スギ属スギ

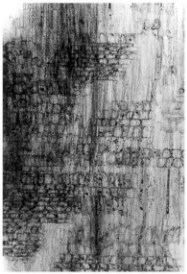


柾目×100

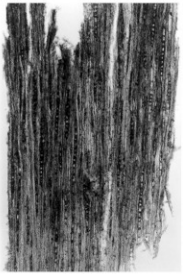


板目×40

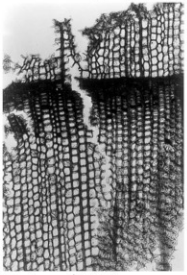
No－5　　木口×40
ツバキ科サカキ属サカキ



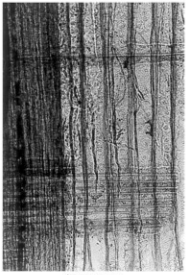
柾目×40



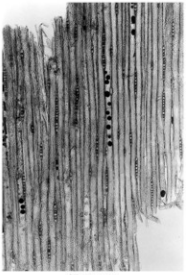
板目×40



No－6　　木口×40
スギ科スギ属スギ



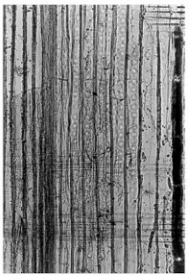
柾目×100



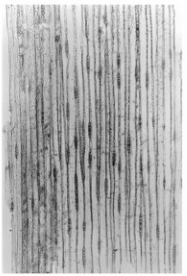
板目×40

図版24　木製品組織写真(3)

No－7　木口×40



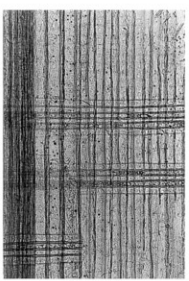
柾目×100



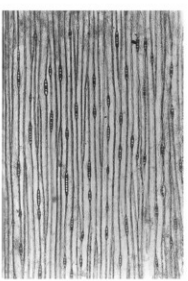
板目×40

ヒノキ科アスナロ属

No－8　木口×40

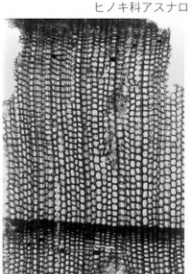


柾目×100

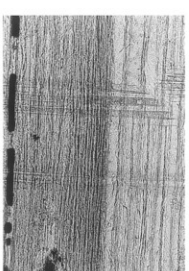


板目×40

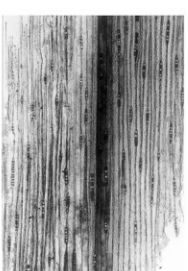
ヒノキ科アスナロ属



No－9　木口×40

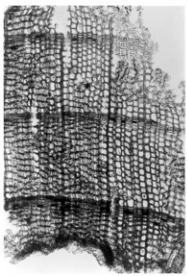


柾目×100



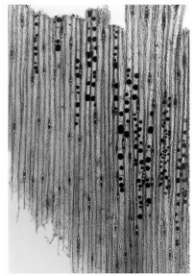
板目×40

ヒノキ科アスナロ属

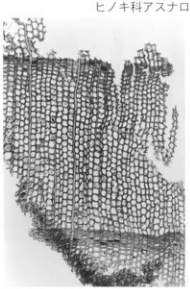


No－10　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

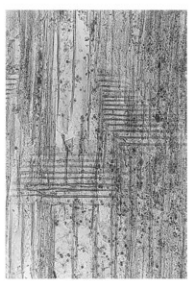
柾目×100



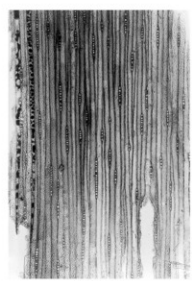
板目×40



No－11　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

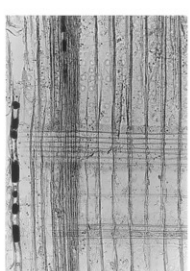


柾目×100

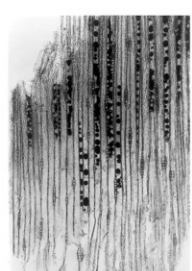


板目×40

No－12　木口×40
ヒノキ科アスナロ属



柾目×100



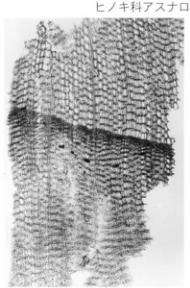
板目×40

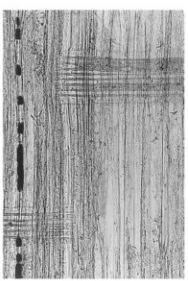
No－13　木口×40

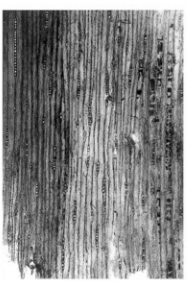
柾目×100

板目×40

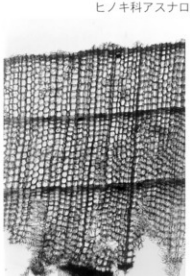
ヒノキ科アスナロ属

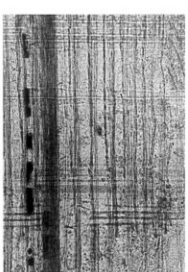

No－14　木口×40

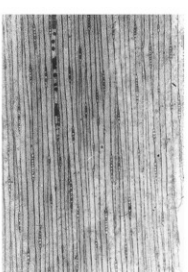

柾目×100


板目×40

ヒノキ科アスナロ属

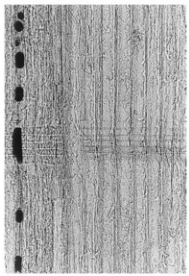

No－15　木口×40

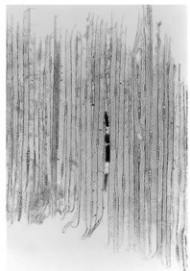

柾目×100


板目×40

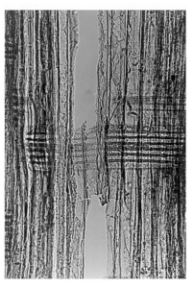
ヒノキ科アスナロ属

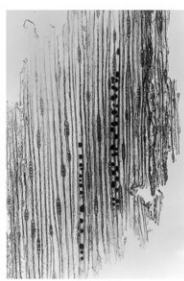
No－16　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

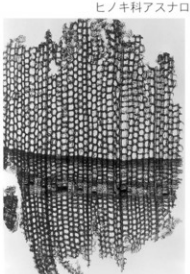

柾目×100

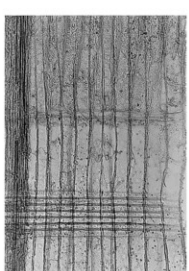

板目×40

No－17　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

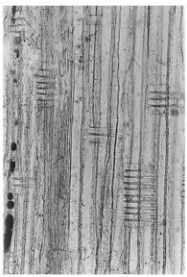

柾目×100

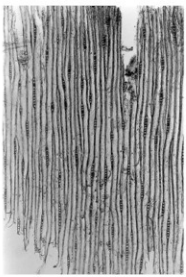

板目×40


No－18　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

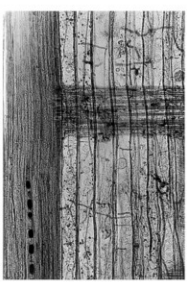

柾目×100

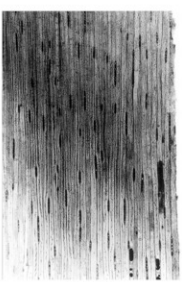
板目×40


柾目×100

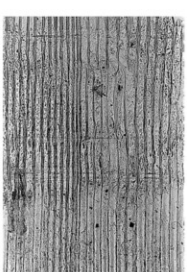

板目×40

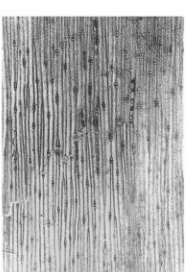
No－19
ヒノキ科アスナロ属


柾目×100

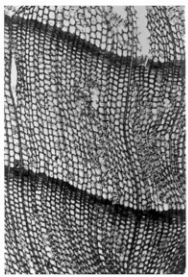

板目×40

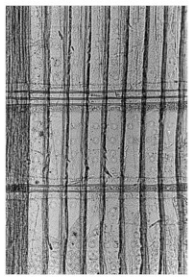
No－20
スギ科スギ属スギ

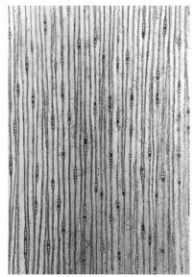

柾目×100


板目×40

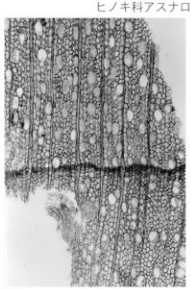
No－21
マキ科マキ属イヌマキ

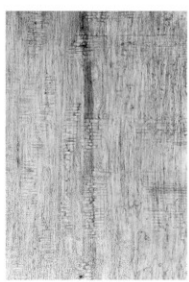

No－22　木口×40


柾目×100


板目×40

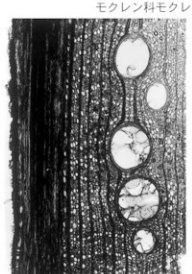
ヒノキ科アスナロ属

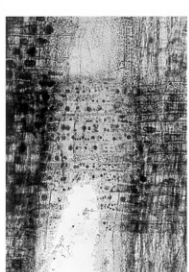

No－23　木口×40

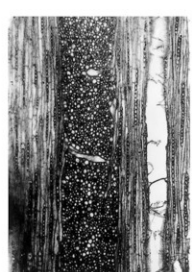

柾目×40

板目×40

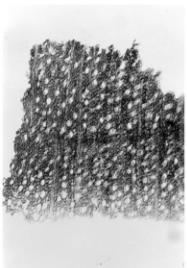
モクレン科モクレン属


No－24　木口×40


柾目×100


板目×40

ブナ科コナラ属アカガシ亜属

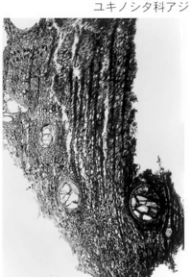


No－25　木口×40

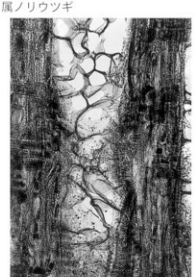
柾目×40

板目×40

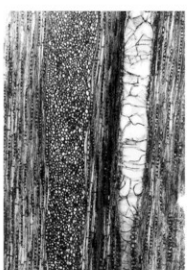
ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ



No－26　木口×40

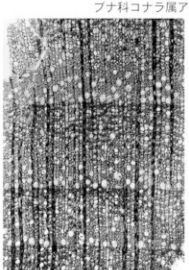


柾目×100

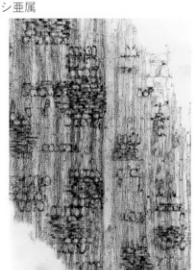


板目×40

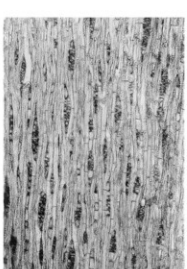
ブナ科コナラ属アカガシ亜属



No－27　木口×40

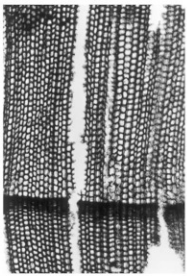


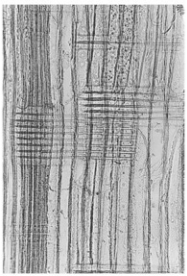
柾目×40



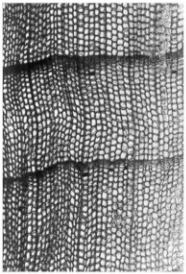
板目×40

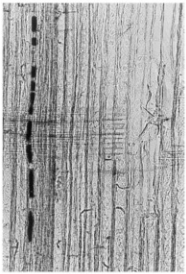
ツバキ科ツバキ属

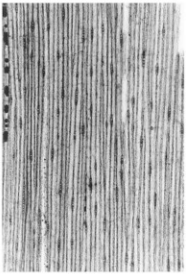

No－28　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

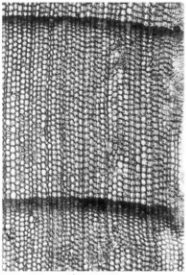

柾目×100

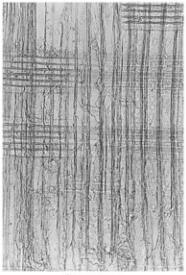
板目×40

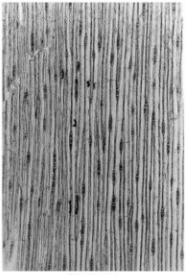

No－29　木口×40
ヒノキ科アスナロ属


柾目×100

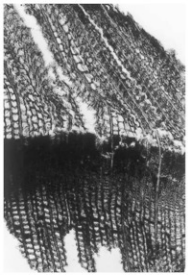

板目×40


No－30　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

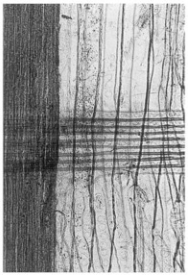

柾目×100


板目×40

図版32　木製品組織写真(1)

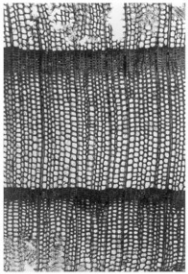


No－31　木口×40
スギ科スギ属スギ

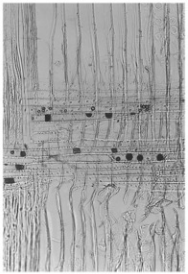


柾目×100

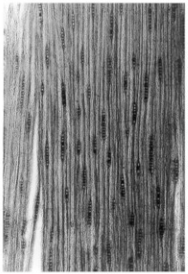
板目×40



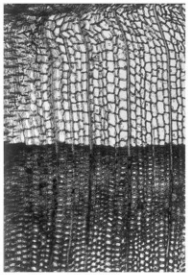
No－32　木口×40
マツ科モミ属



柾目×100

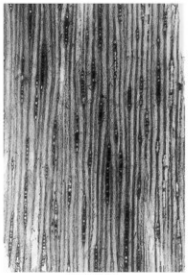


板目×40

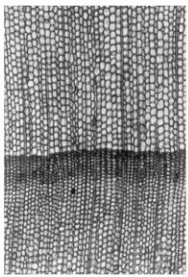


No－33　木口×40
マツ科モミ属

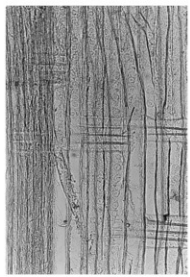
柾目×100



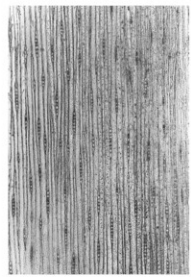
板目×40



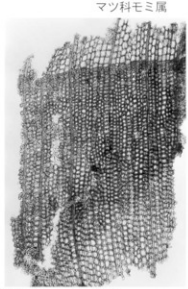
No－34　木口×40
マツ科モミ属



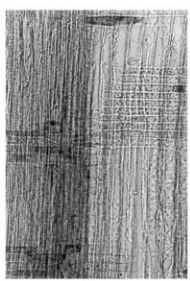
柾目×100



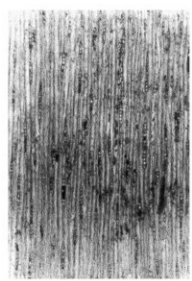
板目×40



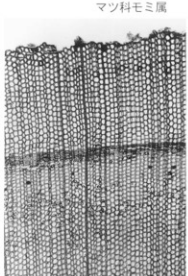
No－35　木口×40
マツ科モミ属



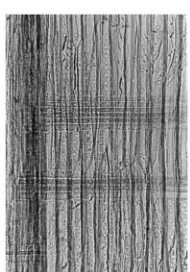
柾目×100



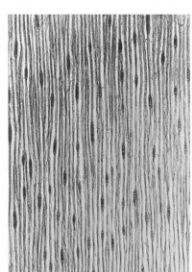
板目×40



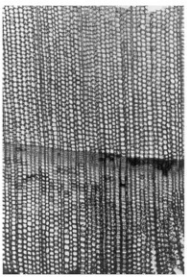
No－36　木口×40
ヒノキ科アスナロ属



柾目×100

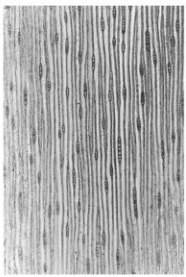


板目×40

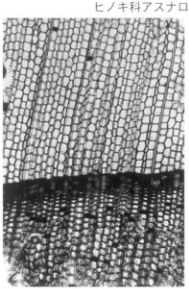


No－37　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

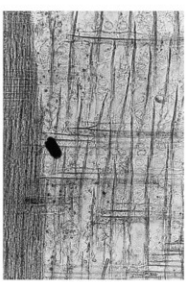
柾目×100



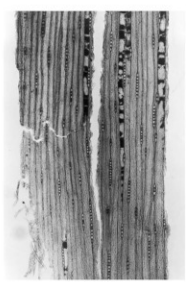
板目×40



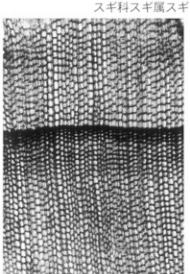
No－38　木口×40
スギ科スギ属スギ



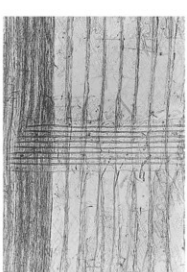
柾目×100



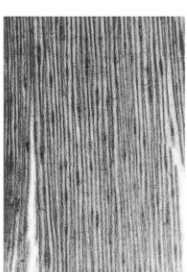
板目×40



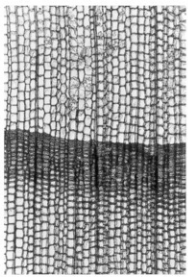
No－39　木口×40
ヒノキ科アスナロ属



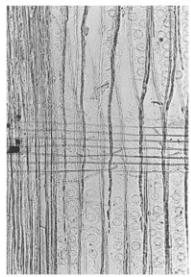
柾目×100



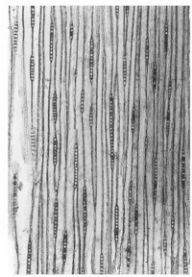
板目×40



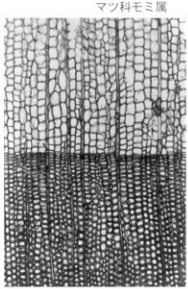
No－40　木口×40
マツ科モミ属



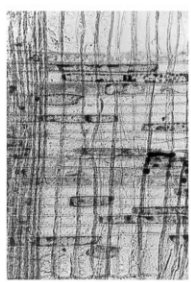
柾目×100



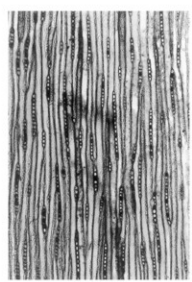
板目×40



No－41　木口×40
マツ科モミ属



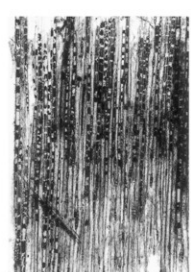
柾目×100



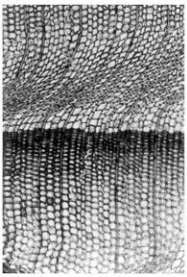
板目×40

No－42　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

柾目×100

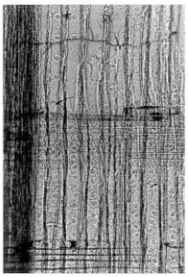


板目×40

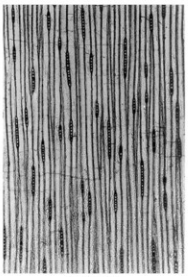


No－43　木口×40

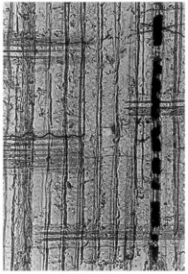
マツ科モミ属



柾目×100



板目×40

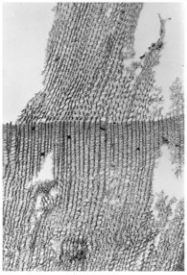


No－44

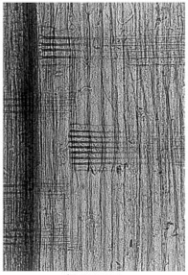
柾目×100

板目×40

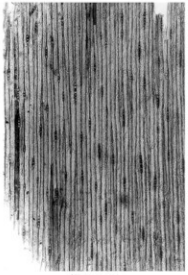
ヒノキ科アスナロ属



No－45　木口×40

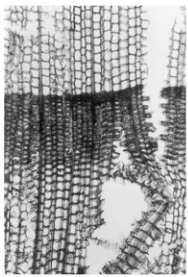


柾目×100

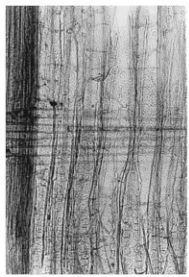


板目×40

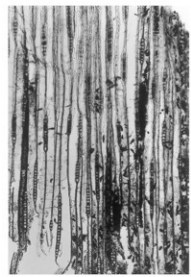
ヒノキ科アスナロ属



No－46　木口×40
マツ科モミ属



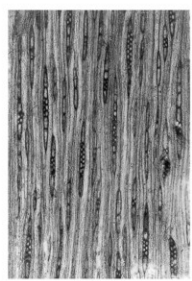
柾目×100



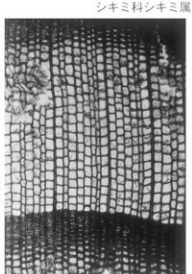
板目×40

No－47　木口×40
シキミ科シキミ属シキミ

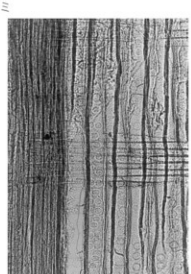
柾目×40



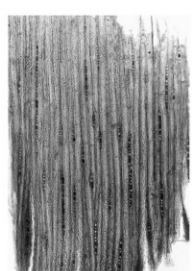
板目×40



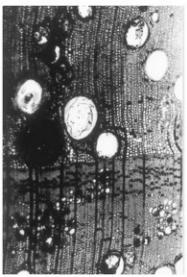
No－48　木口×40
マツ科モミ属



柾目×100

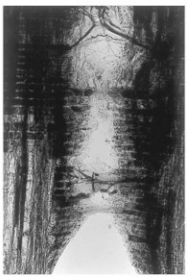


板目×40



No－49　木口×40

ブナ科クリ属クリ

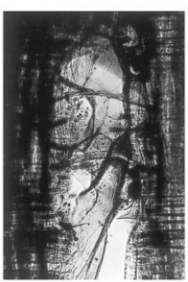


柾目×100

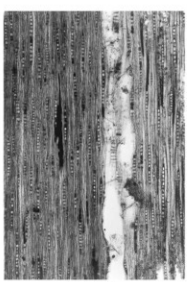
板目×40

No－50　木口×40

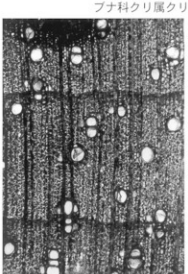
ブナ科クリ属クリ



柾目×100

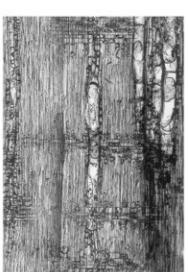


板目×40



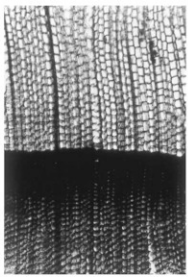
No－51　木口×40

クスノキ科タブノキ属



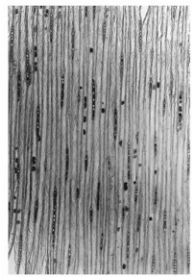
柾目×40

板目×40

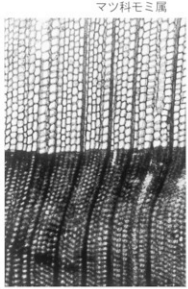


No－52　木口×40
マツ科モミ属

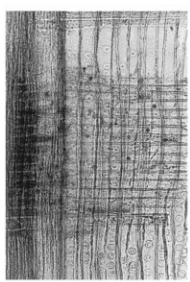
柾目×100



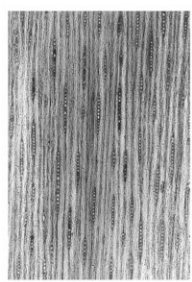
板目×40



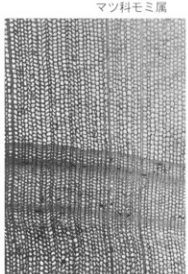
No－53　木口×40
マツ科モミ属



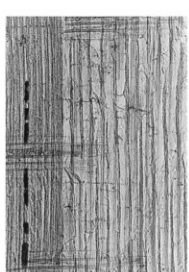
柾目×100



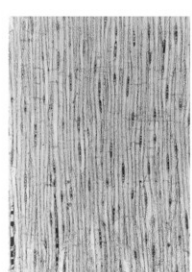
板目×40



No－54　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

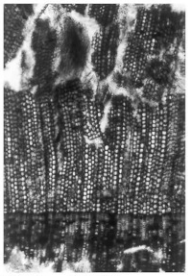


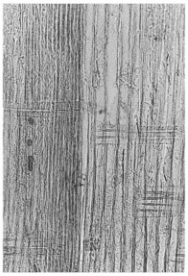
柾目×100



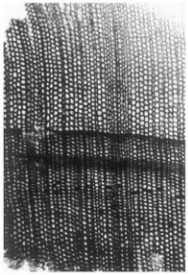
板目×40

図版40　木製品組織写真(19)

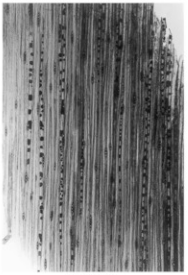

No－55　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

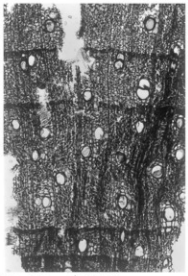

柾目×100

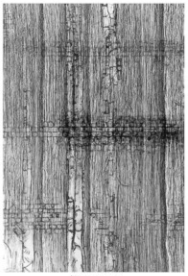
板目×40


No－56　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

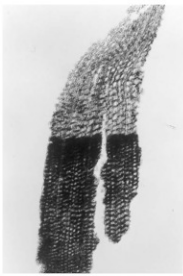
柾目×100


板目×40

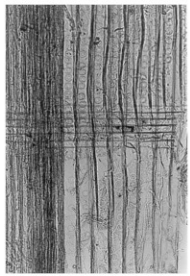

No－57　木口×40
クスノキ科タブノキ属


柾目×40

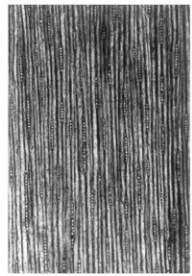
板目×40



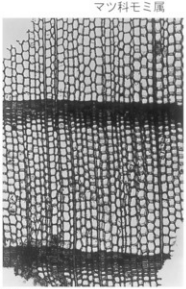
No－58　木口×40
マツ科モミ属



柾目×100

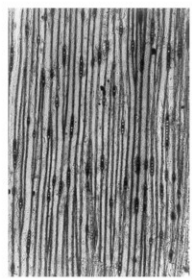


板目×40

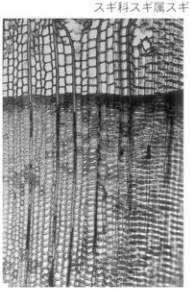


No－59　木口×40
スギ科スギ属スギ

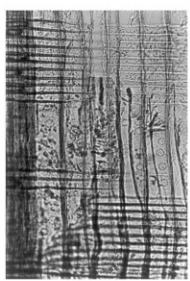
柾目×40



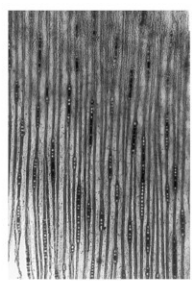
板目×40



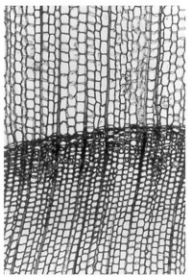
No－60　木口×40
マツ科モミ属



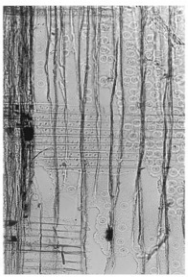
柾目×100



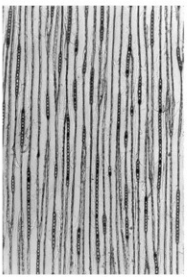
板目×40



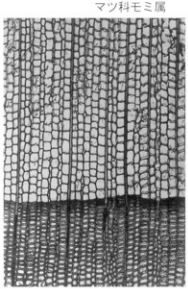
No－61　木口×40
マツ科モミ属



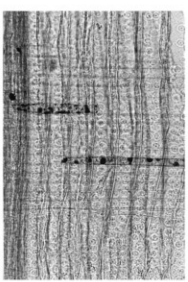
柾目×100



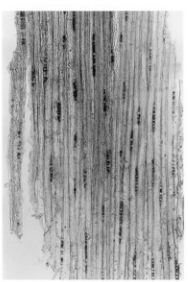
板目×40



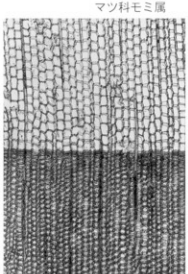
No－62　木口×40
マツ科モミ属



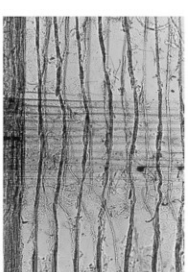
柾目×100



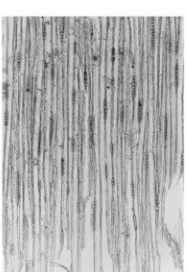
板目×40



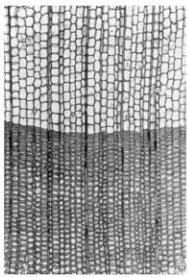
No－63　木口×40
マツ科モミ属

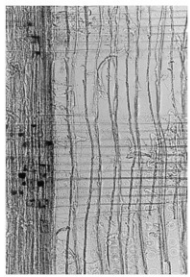


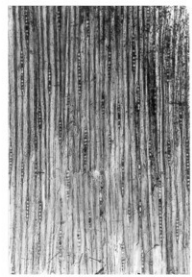
柾目×100

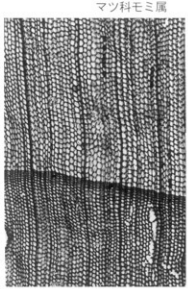


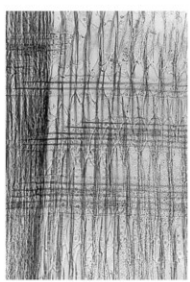
板目×40

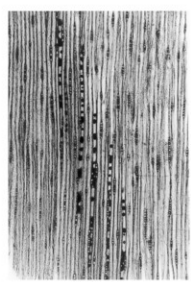

No－64　木口×40
マツ科モミ属

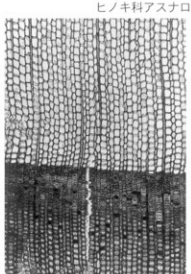

柾目×100

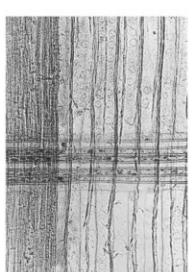

板目×40

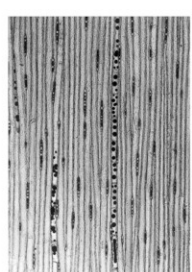

No－65　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

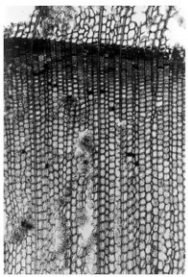

柾目×100


板目×40

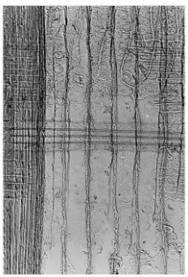

No－66　木口×40
スギ科スギ属スギ


柾目×100

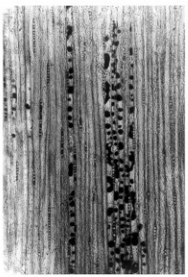

板目×40



No－67　木口×40

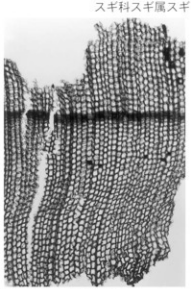


柾目×100

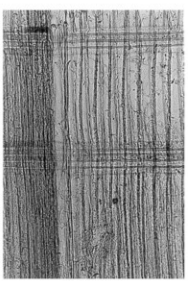


板目×40

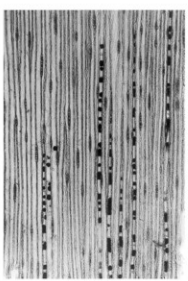
スギ科スギ属スギ



No－68　木口×40

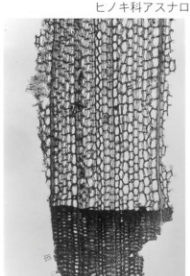


柾目×100

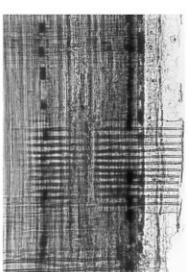


板目×40

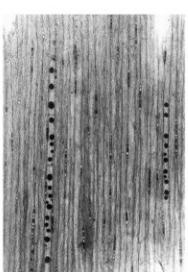
ヒノキ科アスナロ属



No－69　木口×40

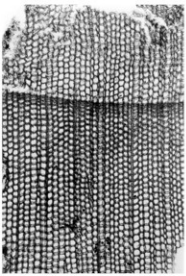


柾目×100

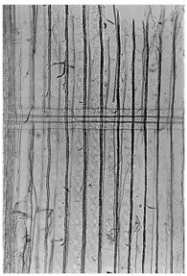


板目×40

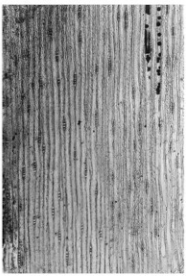
スギ科スギ属スギ



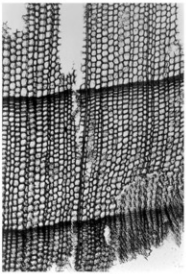
No－70　木口×40
ヒノキ科アスナロ属



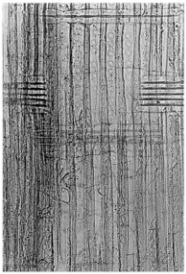
柾目×100



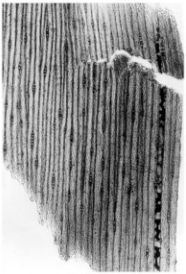
板目×40



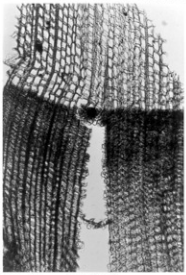
No－71　木口×40
ヒノキ科アスナロ属



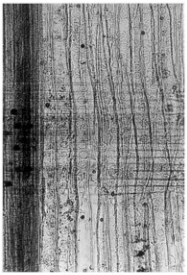
柾目×100



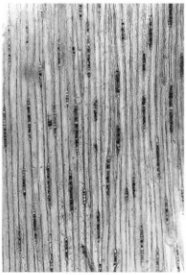
板目×40



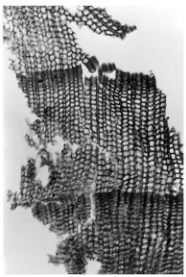
No－72　木口×40
マツ科モミ属

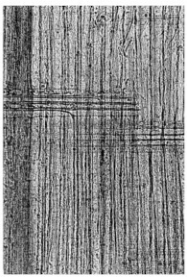


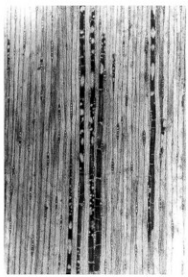
柾目×100

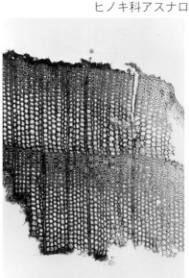


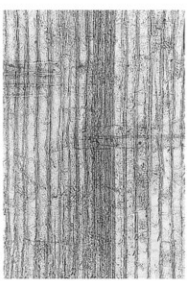
板目×40


No－73　木口×40
ヒノキ科アスナロ属

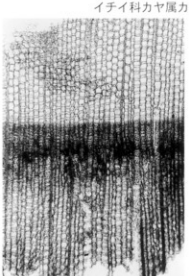

柾目×100

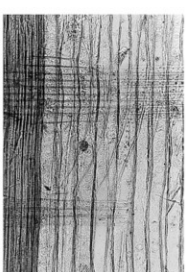

板目×40

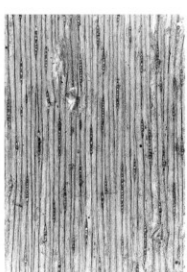

No－74　木口×40
イチイ科カヤ属カヤ

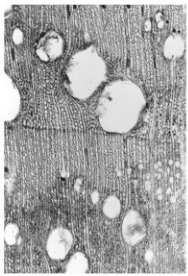

柾目×100

板目×40


No－75　木口×40
マツ科モミ属


柾目×100


板目×40

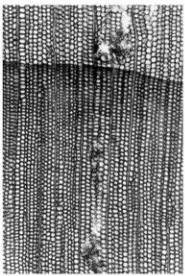


No－76　木口×40

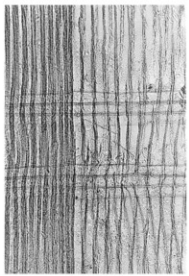
柾目×100

板目×40

ブナ科クリ属クリ



No－77　木口×40



柾目×100

板目×40

イチイ科カヤ属カヤ

報告書抄録

ふりがな	おかだむかいいせき　ほんだしやかたあとはっくつちょうさほうこく
書名	岡田向遺跡・本田氏館跡発掘調査報告
副書名	伊賀市岡田・柏尾所在
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	287
編著者名	中川　明
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒 515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　℡ 0596(52)1732
発行年月日	２００７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
岡田向遺跡	伊賀市 岡田 字向	216	f191	136度 12分 04秒	34度 40分 10秒	20040916～ 20050131	212	農村総合整備事業(諏央伊賀地区)
本田氏館跡	伊賀市 柏尾 字中森	216	f144	136度 12分 11秒	34度 40分 06秒	20040916～ 20050131	1,400	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡田向遺跡	集落跡	古墳時代	溝、建物	土師器杯・甕、須恵器杯・蓋、木製品農具・建築部材・曲物 (重量75.6kg)	
本田氏館跡	城館	室町時代以降	曲輪、通路、中世墓・土坑	常滑焼壺・五輪塔・古銭 (重量51.9kg)	
その他	(株)吉田生物研究所による木製品の保存処理および樹種同定結果				

要約　岡田向遺跡は、柏尾地区の丘陵裾に広がる遺跡である。谷地形が遺跡の中央部を木津川に向かって形成され、僅かな平坦部に存在したと考えられる。建物跡の柱穴が確認され、須恵器が出土し、流路からは容器や運搬具のほか柱材などが多量に認められた。また、近接する本田氏館跡で、山城の施設である曲輪や通路跡が数箇所確認できた。積石を伴う中世墓も中腹や丘陵頂で見つかっている。

三重県埋蔵文化財調査報告287

岡田向遺跡・本田氏館跡発掘調査報告

～三重県伊賀市岡田・柏尾所在～

2007（平成19）年３月

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　　株式会社アイプレーン